川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.350

七月號

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿一年七月一日發行第十一卷第七號（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年・通巻三百五十号

・宴　柳　の　夢・

川雑　川柳まつり

―ルークンコ柳川む挑へ楯勝優―

★★日時　七月八日（日）午後一時

★会場　光明寺

大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前
（市電下寺町又は日本橋三丁目下車）

華やかな紅提灯に爽やかな白一色、白扇の小波に紅潮した頬が、きようの歓びにひたる。本社主催の川雑川柳まつりは、左記プロによって賑々しく開催いたします。ゼヒ柳友お誘いの上御出席下さい。

司会　西尾　栞
挨拶　北川春巽

柳話　麻生路郎

特別課題「社員」（三句）麻生路郎選
（特別課題の出句は句会出席者に限る）

象題
「毛髪」（三句）麻生路郎選
「本妻」（三句）中島生々庵選
「付添」（三句）戸田古方選
「晩酌」（三句）市場没食子選
「浮気」（三句）菊沢小松園選

席題（二題当日発表）

呈賞
★兼題天位に不朽洞賞★特別課題優勝者に路郎賞を贈呈★優勝者所属の会に優勝楯を贈る（優勝楯は明年七月返還・川雑支部・準支部に属しない作家が優勝された場合は川雑本社の獲得となる）

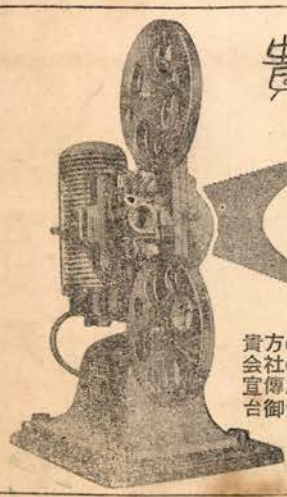
余興　有志諸家

会費　百円（参加者全部にお土産を進呈）

参加の会（大阪市・大阪府）
川雑本社・川雑阿倍野・川雑淀川・川雑桜島・川雑池田・川雑堺・川雑玉造・川雑西成・川雑大鉄局・川雑天王寺局・鳥ケ辻・杏林・南海電鉄・帝化・みをつくし・交通局・交助会・富柳会

★　散会後有志懇親宴（第二会場）会費五百円　★

大阪市住吉区万代西五の二五
川柳雑誌社
電住吉㊲六〇八一


貴方の8mm
アロー映写機
動く写真の記念アルバム
貴方の学校・会社の記録、宣傳用に御家庭にも一台御備え付け下さい
大阪 株式会社 朝日電桟製作所 東京

スマートで着心地のよい
O.S.Kのレディメード
株式会社 大坂商店
大阪市東区糸屋町一丁目二番地
電話 下(94)1745・5563番

窓口談義

麻生路郎

★

又選挙か。こん度こそは公明選挙をせよとか、するとか云って、騒いではるけど、あほらしやの鐘が鳴ることでっしゃろ。

私は提案をしとうおます。議会を大阪へ移すことを。そうすると、よう儲りまっかと云うアイサツで議会がはじまる。イヤ、近ごろはリベートがドカ減りでな。てなことで、お互いにニヤ〳〵して、そのくせタンマリと儲けることにする。議会が大阪へ移ると、議員がみんな大阪弁になる。すると、暴力議員は意気銷沈や。ドヤシたろか、ドヤシてみいではケンカも張合いがないからな。

「議会なんかエ、加減にして早う帰へんなはれや。お燗が冷めまんがな」と、二号さんからジャン〳〵電話がかかる。

すると、ケンカなんか、あほらしうて、してるまがあらへんやろと思うんや。公明選挙運動よか、議会を大阪へ宿替えさす運動でもした方がよっぽどましやで。とても名案やろ。ドヤ、賛成せえへんか。

★

ネコもシャクシもカメラを肩にしている。アーアーである。

オレはカメラなんか持たんよバカ〳〵しくってネと云う時代が来そうである。

★

ある女子大へ行ったら、レコードをかけて、みんながダンスをしている。なか〳〵ゆかいである。

アルバイトサロンへの近道がこんなとこにあるんやなアと感心した。

★

ある未亡人を訪ねた。待たされてる間に、コレでも御覧になって下さいと、「暮しの手帖」と云う本を持って来た。新聞広告では知っているが手にするのはじめてである。表紙をめくると、すぐウラに、

「これはあなたの手帖ですいろ〳〵のことがここには書きつけてあるこの中のどれか一つ二つはすぐ今日あなたの暮しに役立ちせめてどれかも一つ二つはすぐには役に立たないように見えても、やがてこころの底ふかく沈んで、いつかあなたの暮し方を変えてしまう

そんなふうな

これはあなたの暮しの手帖です」

とある。中をパラ〳〵開いて見たら、電気洗濯機のことが書いてある。一寸読んで見たら、電気洗濯機屋の代弁としか思えない広告文である。或は記事広告なのかも知れない。こんな説明なら電話一つで、飛んで来てシャベリまくってくれそうである。こんな本が一冊百六十円もするのであるからおどろく。いつかあなたの生き方を変えてしまう「川柳雑誌」がタッタ五十円であることを、もっと〳〵世間に知ってもらいたいと思った。

7月号目次

題字……麻生路郎
表紙……米田三男之介
窓口談義……麻生路郎……(三)
川柳家の二十四時
前田伍健・北川春巣……(一二)
船木夢考・岸本水府……(一三)
池上知恵美さんを訪ねて……丸尾潮花……(一三)
木の芽峠に杏園翁の画趣……安川久留美……(一〇)
新川柳鑑賞……麻生路郎……(一一)
幸福を幸福に……戸田古方……(一六)
面白い味のある文章を……品川陣居……(一四)
わが兄……(一六)
松江梅里・生島波濤……(一七)
親の感慨……東野大八……(一三)
雅号はがき……不二田一三夫……(一七)
山陰川柳大会
河村日満・大西八歩……(一四)
増田耕民・杉谷湖山……(一五)
麻生路郎・麻生葭乃選……(一五)
青ペン赤ペン……(一一)
★
川柳塔……麻生路郎選……(六)
同舟近詠……諸家……(一四)
近作柳樽……麻生路郎選……(一六)
北川春巣選……(一六)
一路集「麦酒」……宮田不二……(一八)
「途中下車」……国弘半休……(一八)
金泥集……麻生葭乃選……(一五)
各地柳壇……麻生葭乃選……(一九)
川柳第二教室
作句指導……戸田古方……(一四)
不朽洞会から……(二四)
柳界展望……(二五)
編集室……(二五)

面白い。味のある文章を

品川陣居

いつも人様の書いたものからヒントを得て書くが、これは、そういう人様の文章をのせる天下の公器である新聞なり、雑誌なりは、その時代というものを含みにしているのであるから、やはりそれを無視しては、それにつゞいて文章を書くイミがないということになる。

そこで「世界」四月号にのった短章に『文章を書くこと』という慶大教授佐藤朔先生のものが見付かったので亦々拝借してみる。

――日本人は外国語が下手である――殊に話すことと、書くことが下手である。これはその通りであり、第一、私自身が下手なのだが、話すことはともかく、日本語で文章を書くことが下手なものに、外国語の文章がうまく書ける筈はない。ただ文法的に間違いのない実用文を書くことか、日本語を外国語に飜訳できる人は多いだろう。しかし外国語で自由に文章が書けるとか、面白い、味のある文章を書く人となると、ずっと少くなる。八千万も人口があるのに、ひょっとしたら百人位しかないのではないかとも想像される。しかしその百人のひとは、日本語でも、面白い、味のある文章を、外国語よりも自由に、楽々と書けるひとでなくてはならない。ロクな日本語の文章が書けなくて、外国語でうまい文章を書ける筈はないからである。

ところが日本人でありながら、普通の人は日本語の文章を書く機会さえ案外に少ないことを忘れている。小学校のときは、作文や綴方の時間がきちん〳〵とあって、先生から文章を直してもらったり、採点で評価されて、文章を書くことにはげみが出たり、上達したりするものである。殊に綴方教育に熱心な先生にぶつかると、生活綴方とか自由作文とかに興味を持たされ、時には神童めいた少年作家が生れたりする。（中略）日本人の文章を書く力は、大体小学校のとき養われ、その後は見よう見まねで書いているだけで、それも大多数の人は一度社会へ出てしまえば、書く機会さえじつに少なくなってしまう。（中略）

第一、われわれとしてはふだん文章を書く経験の殆んどない連中が、よくまあレポートや論文が書けるものだと、あきれもし、感心もするのである。だから文学的でなくても、理路整然として、スキのない文章というのならいいが、事実、材料、理屈だけによりかかった、イキギレのするような文章が多いのである。（中略）大学生に文章を書く習慣があまりないとしたら、日本人全体として文章を読む人は沢山いても、書く人は非常に少ないことになる。新聞、雑誌の原稿の筆者は、専門の如何を問わず、やはり非常に特殊な人々である。これではいけないのではないか。中学生、高校生、大学生、社会人はもう少し日本語を大切にし、文章を書く機会を多く持って欲しいものである。

大体これで佐藤先生の論旨は尽きるが、ぼくらはまことに汗顔そのものである。

社会人といっても極く少なく限定して川柳人と、作句そのものは本職としても、文章をかく人は、まことに少ない。ぼくごとき作句はもちろん文章の方もデタトコ勝負のものは論外だが、川柳家らしい文章を書く人――といえば暁の星のごとくリョウリョウたるものである。

川柳の雑誌は川柳作句を主体として売れているので、文章は無くてもいゝのだと極論する人もあるが、それでは第一、このぼくが困るのである。それは冗談だが、どの川柳雑誌を見ても、いつも同じ顔振れが書いて、論旨はマンネリズムになりがちだし、面白くもない。バラエティに富むということは、一般商業雑誌の編集者の頭を痛めるところだが、雑誌々々に御座つきの執筆者があって、それはまたそれで読者がついているのだが、その外どの雑誌でも新人発掘には骨を折るのである。

ところが、川柳の雑誌というものは由来特殊な存在であって作句発表の道場であるから、すべて川柳というキャップをかぶっていなければならない。書かれる文章も川柳的のものでなければならない。とするといよいよ川柳的文章を書く人物が払底する、川柳の雑誌の編集者は執筆陣をかくとくするのに骨が折れるのである。一枚か二枚のメモかノートめいたもの

を書く人はあっても、長いものを書くとなると息切れがしてくる。だが、相当の人に、長いものを書かせるとなると、在来のような原稿料なしというわけにもいかないが、地方のある雑誌――「川柳雑誌」傘下と、ぼくなど考えているから、はっきり書くと松本で出ている**石曾根民郎**氏の『しなの』のごときは、学者先生の原稿をズバ〳〵のせている。ぼくの推測だが民郎氏は、われわれ無信の者と同様原稿料は出していないとおもう、また出せるような経営ではないときいているからである。『川柳しなの』にのっている文章は、必ずしも川柳的なものばかりではないが、なかなかバラエティにとんでいて面白い。石曾根氏の好みがよく紙面に出て楽しいが、あれを商業雑誌並みのコストをかけてやったら大変な経費だろうとおもう。

そこで、ぼく考えるのだが川柳家は、もっとどしどし文章を書いてみてはどうかということである。近頃は若い川柳人の間に長いものを書く傾向が出てきているが、じつのところぼくたち老人は、あまりそれらのものを読んでいない。読みもしないで書けといったところで矛盾しているが、ぼくたち老人はひっこんで元気のいゝテーマを取りあげてほしいのである。

それにつけて神戸の『ふあうすと』三、四月号で、あるお医者さん（**光武幻太**氏）が「**田中五呂八**論」を書いていられてなかなか、しっかりしたお手並だった。これは、若い方ではないとしても、新顔であるにはちがいない。ぼくなど**五呂八**と同年ではあったが、彼の活躍していたころは、川柳に深入りしていず、名前は夙にきいていたが、ごくそのアウド・ラインしか知らなかった、お蔭で五呂八を改めて知って感謝している。

ぎろん――というものはいうまでもなく時代を反映していて、同じ神・愛・人間を説いても、考え方の大根（おおね）は変らないにしても、語彙がちがってくるし、時代と接触していく方法にも差異がある。ぼくらはやはり、その時代々々の新しい語彙で、新しい接触のしかたでないと古くさく感じるしビンと来ない。時代とともに流れて行かねばならないのだ。

現在、川柳評論では**石原青竜刀**大人が川柳非詩論というテーマで、妥当な健筆をふるわれているが、新しい連中には異論があって槍をつけられているが、これは好みのもんだいであるから大人の評論の価値とは別である。

いま評判になっている二、三の若い人のものは、じつはよんでいないが、自意識が強いというか、労働組合員のぎろんのように何か取っつきにくい。

ぼくなどが、いま文壇でけんけんごうごうぎろんされている〃背徳〃とか〃非倫理性〃というテーマで川柳を考えてみようとすれば、何か面白いものが書けそうな気がしている。

トルストイなどが主張した個人主義ということも、**田中五呂八**の〃個〃を尊重するということも、それらはエゴイズムではなくてインヂビリアリズムであるのだから、すこし極論すれば今日の背徳にも非倫理性にも通じるので、ぼくらはたえず流れて行く思考を追っかけてゆかねばならない。こういう考え方を浮気なジャーナリズムの新らしもの喰いとして軽蔑すれば、時代から遊離してしまって面白味をなくしてしまう。

川柳評論も面白くなければならない。その面白いとおもうものゝ中から、何かをつかんで作品化すればその川柳は面白くなる。面白い――ということは笑うことではなく、時代をつかんで生きるということである。

お袋はもったいないがだましよい

という古川柳の秀句を――お袋なんて、古往今来こんなものさ、甘いもんだと北叟笑むのは伝統派の切り札であるが、もうそういういゝお袋族は稀少になって、なかなかどうして投書夫人気質（かたぎ）が強くなっているから、せがれの方も安心はしておられない。

本題の方からそれてしまったが〃文章を書くこと〃のむつかしさは、前段の佐藤先生のおっしゃるように、これは！とおもうものはまことにすくない、小説や評論書いてオマンマたべている文壇のお歴々でさえなかなか、これは！というものは書いていない。佐藤先生のおっしゃるように、面白く、味のある文章の書けるのは、日本人八千万のうち百人ぐらいだというのも先生のユーモアだろうが、**森鷗外**のものでさえ悪文とされた時代があるのだが、文豪**夏目漱石**、**芥川竜之介**でさえ古典として残されようとしているのだからうっかりはできない。ぼくの大好きな**永井荷風**先生のものでさえ近来はあまりいたゞけないものがある。

ぼくなど新聞や雑誌の文章は一種の消耗品だと考えている。ことに新聞の文章は〃何時、何処で、誰が〃が主軸をなしているのだから名文を求める方が無理だが、ピチピチしていて高いセンスがあってなまじの執筆業者の文章よりぼくなど高く買うのである。

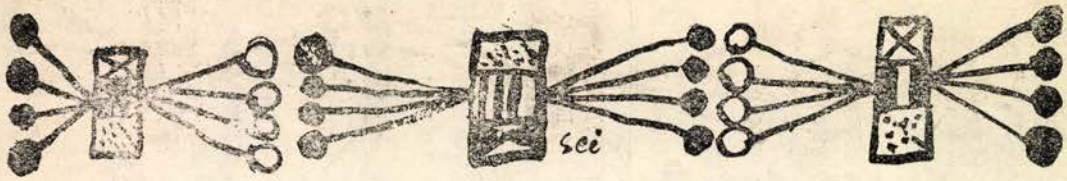
学術書など、その学問や技術を正しく伝えればいゝというが、ナンとその無味乾燥なることか。これを勉強する方も辛抱強いが、よくこういうものを高い金出して買うとおもうくらいのものである。あらゆる科学、経済その他のものでも名著といわれるものはやはり名文であった。

ぼくおもうに――これは新仮名や制限漢字の普及いらい、ことに甚だしくなったようである。ぼくは、ぼくの文章は〃消耗品〃だとおもっているから新仮名でも制限漢字でもかまわず使っているが、もっと日本人は――ことに川柳人は、日本の文字や文章を大切にして、〃面白い味の、ある文章〃を守ってゆきたいものである。

――少々柄にないテーマで恐縮だが、〃ジャーナリスト**麻生路郎**〃先生にはおわかり頂けることとおもう。

〔四、一二〕

麻生葭乃著・米田三男之介装幀
葭乃句集
福壽草
定価二百五十円
送料　三十円
菊半型・函入
本書は川柳の母・麻生葭乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいて居ります。
大阪市住吉区万代西五の二五
発行所　川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五〇番　電話住吉（四）六〇八一



川柳塔

大阪市　中島生々庵

家族五人住み付く家を見て歩き
出たらいいでせうそんな言葉は慎しもう
見返えしてやれと大きな方にきめ
今度こそ借家でないぞ妻の顔

豊中市　戸田古方

映画　失われた大陸

爆竹のもっと鳴れ鳴れ喜の日なる
通信の用もはたしていた吹矢
オートメーションこわれることもあるように

大阪市　市場没食子

二大政党

小数党むくれにや損とばかり拗ね
卒業のアルバム名さえもう忘れ
お金さえあればと族へ手ぶらで出
草野球此処にも邪魔なカメラ族
役人てほんまに働かんなと思い
社長にも夫人のノイローゼが遷り
脱税で株も買うとき土地も買い

末っ子中学へ

朝寝坊で越境中学など嫌い

大阪市　西尾栞

指しきらす気の一本喫いつける
麻雀よりましと将棋へ出してくれ
母の眼に愛の巣とかがあぶなくて
老嬢のあせりか国境越えた恋
雑婚の悲劇娘でない親でない
俺丈けは丈けは違うと入れ上げる

東京都　宮田不二

内縁と云えばにべなく疑われ
仕上げには触れず生地だけ賞められる
金魚二匹無声映画と云う形

東京都　前山北海

応待に公私の別を刻み過ぎ
銭湯の中で教え児頭下げ
離別して互いの良さを認め合い

大阪市　正本水客

小雨決行の通りになった日曜日
受付が混雑するほど本山は流行り
植木鉢持てば幸福そうに見え
手土産の酒さっそくに呑んでくれ
五月下旬庭はいつしか生い茂り
頼りにしてまっせと冗談めかしとき
稲妻へ蛙ゆっくり向き直り
なりわいの鱗かわいた手をはたく
パチパチと課長の前で割ってみせ

大阪市　丸尾潮花

世間の義理とは情のない証拠
妻の眼のなかにも恋のひとが住み
ぼろくそに言われて切れる手を知らず
もう酒の力は借りぬひとになり
清元を地でゆく恋がして見たく
気に入らぬ客へ三味線持って立ち

大阪市　北川春巣

ホノルル市　内藤草一郎

ゴールデンウイーク太陽の光りよう
屋上の汽車へ直行する子連れ
仏壇にほこり一つもない旧家
折詰を貰いステッキ忘れて来

三　朝

朝見ればへんてつもない露天風呂

奈良県　尾崎方正

人妻になったお顔に気の疲れ
要職で少くなった言葉数

大阪市　武部香林

嫁に嫌われ別居たのしむ
さびしさにたえず老婆は琴を弾き
自転車の上で老けてる配達夫
こゝと言うとこで薄情見破られ

大阪市　木下幽玉

おくればせながら吾が家にもスピッツ
入院へ妻結果論ばかり云うて

大阪市　福田妄夢

金魚五六匹孤独を愛するのが一匹
金魚金魚ぼくもお前もおんなじいのち
湯の宿へ来ても市況をきくマダム

出雲市　尾緑之助

銀婚二句

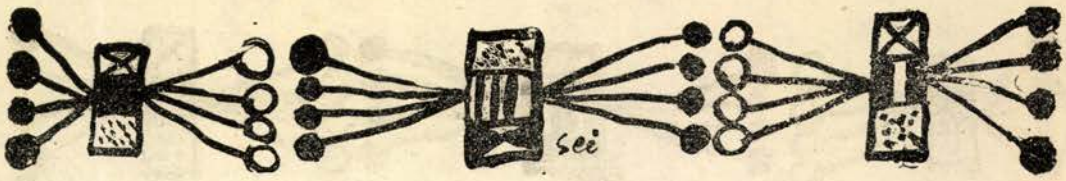
二十五年互いに年齢を取っただけ
峠なおきつく銀婚笑い合い
婦人会報告微に入り細に入り

鳥取にて

やあ〳〵と合って別れて人恋し
養老院ぼそ〳〵夏の対話劇

大阪市　水谷竹荘

金持てば気分だけでも若返る



孫出来てからはオモチヤに趣味をもち
老らくの恋を仲居はとりもつき

日本ライン

景色より母のゆれるが気にかかり　下関市　弘津柳慶

プロ選手になって孝行してあげる
無愛想に男兄弟対談し
すられましたと女寂しく笑ったり　広島市　国弘半休

打水へ目高二三度はねて死に
蔵だけが残って旧家畑なり
奥様に上衣持せて酔いつぶれ
出迎えをすっぱ抜く気の途中下車　兵庫県　小西無鬼

紙撚りへ迄も気性を現わして
山桜人が見ようが見よまいが
金貸がバットを喫うも人生か
これ程に喜ぶ帯を買い遅れ
汽車の戸はガチヤンと締めるものらしく
温泉帰りの今日は宵寝をするに決め　尼崎市　小林文月

甥の修学旅行

時ならぬ梅雨に似た雨富士見せず　大阪市　冨岡淡舟

新入社手を抜く事も教えられ

三朝にて

露天風呂男ばかりでしようむない
コンクリートで建っても屋号そのまんま
ゆきずりに住所きくのも湯の宿の　奈良県　飯降白香

五月の朝おもちやのように貨車がゆき
母のこと思うて今日も席譲る　奈良県　西辻竹青

台風のお蔭でニコヨン食いつなぎ　山口県　長野井蛙

心までは売らぬと女まだ力み　布施市　森下愛論

母の日にせめて肩でも叩きましよう
静かなる平和我が家が飽きたらず　大阪市　松江梅里

素人の悲しさ合の手が待てず
いゝ経験になりましたわと別れる気　岡山県　直原七面山

柔肌に触れさせもせず恋と言う
逢曳きへ仕立屋さんが急がされ
金になる恋はないかと慾深が
歯の浮く様な讃辞を棺の中で聞き
褒めるもの無くて子供のやんちや褒め
借金の相談夫人の方へ掛け
たよりにしてまっせと保母が園児にからかわれ
議長席で人の心の流れを見
押花に思いを寄せたのは昔
手を焼かすのは先生の子とお医者の子
ロマンスグレー妻があろうがなかろうが
先生が批判されてる参観日
爛漫の花に娘が例えられ
三号になって洋裁通いなり
冗談へ眉立てるのも未亡人
母ちやんが実権持ってる綴方
鈍才と才媛目出度く結婚し
ヘップバーン男の様な口もきき
瀬の音もトロ〳〵春と云う音色
使い方は妻が知ってた洗濯機　大阪市　西森花村

エスカレーター降りてアベック又喋り
音楽会拍手に眼が覚め拍手をし
眼が覚めりや丁度映画は済んだ処　鳥取県　河村日満

飲みまひよやないかと訛り丸出しに
奥様の芸アンコールアンコール

潮花さんの舞に

一つではやめさせぬ手が鳴りつづけ
新聞に御夫妻若う若う載り　岡山県　田村藤波

お見合のお菓子一つも減っとらず
母のない理由をテストが言いそびれ　岡山県　福島鉄児

最敬礼そんな言葉を子は知らず
淋しさをまぎらす壁のプロマイド　岡山県　服部十九平

必勝の決意を眉宇に羽田発ち
忙しいのでと妾宅から電話　尼崎市　長谷川三司

妻揚子孫も咥えるものと知り　兵庫県　若林草右

三分の式辞へモーニング着て出かけ
青春を給仕とは人生寂しすぎ　大阪市　足立春雄

ペニシリン教授が死んで騒がれる
日曜日予報通りの雨が降り　高知市　大西迷窓

三味習うてやろかと思う金が出来
話せない男へ用事だけを告げ

一生を暮す会社の堅い椅子　下関市　阪田良坊

青年の純潔自殺して抗議　下関市　石川侃流洞

頼りない夫にされて寝てしまい

聊さかの好意へ内幕話し出し

陽炎へ貨車を放して昼にする

地下足袋へ女を捨てた意地を張り　大阪市　安岡珊枝郎

人の好い証拠電話へあのおじぎ

アベックの初歩は裏町練り歩き　石川県　野村味平

逆境にいる秀才の薄く禿

添乳のままでママさん夢もなし

空想の〇時をきいてふとあわて

新住居畠の窓もうれしがり　広島県　山田季賛

アルバイト角帽だけはぬがされる

長生の養父を妻がもて余し　大阪市　山本葉光

文楽の人形もキツスさせられる

運転手までに二号が気を使い

アパートの権利に出した持参金

忘れると言わず気軽に引受ける

撮される金のかかった台所　倉敷市　木村千容

ハンサムだけれど頭は空っぽよ

晩年を淋しがらせる民主主義

雲が出て下界の醜をかくしたり

運を待つ肚ができてる懐手

散歩して水のうまさがわかったり

葬式へ元老として座るだけ

年だけは平大臣の資格なり　石川県　那谷光郎

月給のことにも触れていがみ合い

肩を揉む手のありあまる子沢山　堺市　八木摩天郎

アドバルン程に社会は泳がせず

せいの良い時のはなれの金襖　倉敷市　椙原一善

惚れている弱身しるこ屋にお供

新婚の当座は詩などは忘れとり　大阪市　木村水堂

袖の下受け取る方が恩にきせ

家附きの妻を叱った酒気分

財産がなくて葬式円くすみ　実母死去

賑かに葬儀の列へ孫曾孫

悔多き心で通夜の座に侍べり

灰になる斉場までも金次第

骨箱を不肖の胸にしかと抱き　岡山県　岡田夜潮

空き腹へ映画うどんを食うて見せ

お迎えが背負って雨の幼稚園

鼻たれの中にも一級二級あり

お人よしいつもそうかいなそうかいな

母と言う重荷へ化粧とぎれとぎれ

御名案ですと追従言っておき

預金部へ乞食姿が現われる

お人よし化けた女の方を好き

犬の居る家を飛ばして物貰

戸袋を八つ手が撫でる淋しい夜

痴話げんからし水汲を遠慮する

電熱を御利用まけるとは言わず

売切れを倖にして無念がり　茨木市　下山清潮

運動会府会議員も如才なく

病気すりやそりやもう年と言ひくさる　岡山県　本田恵二朗

病気にも間接税がかかっとり

遺産分け憲法だけで割り切れず　大阪市　真鍋一瓢

大阪は悪の栄える灯もともり

あゝ馬車馬時に妻にも毒づかれ

時に利あらずとでも言うのか子が生れ　桜島病院外科病棟で

負けて悔なしトラック通過させた足　京都市　松川杜的

ヨット出す若さが欲しい須磨の浦

みつ豆を喰べに態々途中下車

飲んでゝも上役憎い事を云う

診察室こけしも置いて女医若し　大阪市　後藤梅志

審美眼ならと息子を笑っとく

嫁にやり人が変ったように老け

統計を読むのが恐い未亡人

連休の五月売店ではこたえ

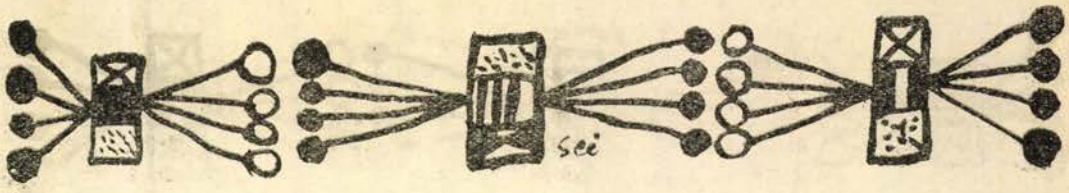
二輛目へ用心深い顔で乗り

物忘れするほどのりが利いたシャツ

洗濯の水が走ってゆく長屋

豚児の絵サンマのような鯉をかき　倉敷市　松村万古

寝言にも言う程ならと親も折れ



本心に背いて暮らす厚化粧
すばらしい余興芸妓に惚れられる
　五月七日倉敷中央病院に入院
きり乍ら投句の出来る籠の鳥
人力も大事と論す注射され
　倉敷市　藤井春日

お披露目の夜は姐さんに委し切り
昇格のそれから持論チト変り
スーさんの威厳事務所へ来て見つけ
　岡山市　津田麦太楼

落ちぶれて牡丹の花も小う咲き
捕物のようにつめ寄るカメラマン
北鮮からニンニク喚い娘が戻り
洗濯機風呂場を狭うして坐り
抵抗もちよっぴりあって好い二号
二号横町けば〳〵しくも干し並べ
青麦に笊を冠った牛の鼻
女房に去られ避姙を後悔し
院長が超勤手当よう稼ぎ
高血圧老妻伴れて何処へ行く
一と身上入れて名取の娘に仕立て
　米子市　小西雄々

純潔を説く女医さんはまだ嫁がず
念仏を口にしにくまれ口減らず
逃げるだけ逃げて帰った回顧録
釣り上げた鮎は夕日を背にうけて
　堺市　高崎雄声

共白髪で生きてるだけで嬉しくて
競輪の負けを車掌へあたっとき
被害者の人権一体どうなるの
坊さんに副業のいる世とはなり

弁当のうまかった頃懐しみ
　大阪市　吾郷玲人

アイデアは戴きますがだけで済み
好調が続いてアスが怖ろしい
晴着着て出たのにオンボロバスが来る
　岡山県　岡田青果

催促に行って催促せずに酔い
はやらない茶店も同じ花吹雲
これ以上産まぬ相談して寝入り
分譲地ひねもす緑の風が吹き
　西宮市　若本多久志

春雨じゃぬれて行こうとよい気嫌
呑むだけの得仲居頭でまだ勤め
皇太子ある日茶漬を所望され
未亡人追いつめられた道で生き
腹立てているのかキュウリの刻みよう
すばらしい天気になった月曜日
よく釣れた自慢は近所へ配つとき
　鳥根県　藤井明朗

恐妻もよし悪友が寄りつかず
　温泉津（ゆの）温泉にて
旅今宵ふと瞞されて見たくなり
　岡山県　永松東岸子

公約のように禁酒を触れて置き
旅役者が父とか肌の白いこと
ロマンスグレー恋が重荷になりやせぬか
坊さんが蜻蛉と一緒にやって来た
無抵抗主義で愛情疑われ
　倉敷市　野田素身郎

損ばかりしていて株通気取りで居
捨身もう事の成否は考えず

背かれた人の写真が捨てきれず
連休へ誰も誘うてはくれず
　倉敷市　安原斜木

仄かなる慕情援助を受けてから
御用聞チャンと落ち目を知って来ず
　長女嫁ぐ
嫁がせて何か空虚な夜の膳
　吹田市　菊田いさむ

金魚屋の前で我が子をふと見つけ
休憩へあと一分の詰手読む
　大阪市　神谷凡九郎

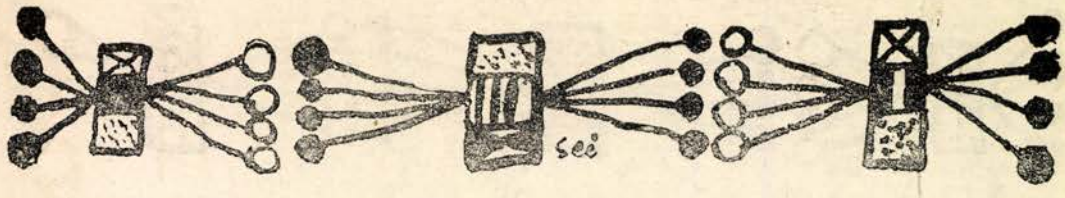
失恋の話笑ってもう話せ
待ち呆け雨までボツリ落ちかゝり
子供の日父には酒がちやんとつき
宝塚みんな夢もつ瞳になって
バックから眼鏡を出して女かけ
　大阪市　山川阿茶

自家用車我世の春の砂煙
　倉敷市　水谷谷水

ありふれた記事か知らぬが親殺し
二号という自覚PTAへ出ず
街娼よどうせわたしは不倫の子
眺望のいい病室を羨やまれ
甘いもの嫌いか税吏不機嫌な
美容院させて議員で騒いどり
　大阪市　木村十悟

盗まれて盗った早さを感じ入り
現直しとはいゝ名なりうさ晴そ
　大阪市　伊達堰子

雨止んでプラカードやっこら腰を上げ
モーニング要る廻状は病気とし



大阪市　不二田一三夫

ストツキングほど融通の利かぬ足袋
親馬鹿をチヤンと見抜いて家出する
妓ども笑わせ妻や子を泣かせ
M過剰髪とズボンにそれを見せ
この人も飲むのかズボン焦がして居
きようも機械のように出てゆく平社員

兵庫県　酒井ひか平

鳥取の砂をはたいて旅を終え
城崎の声も夜行は夢の中
妻連れて来たろと思う湯につかり
途中下車男独りの旅もよし
急カーブ此れより一路目的地
停年へ九州男児こせ付かず
ハイキングパパとママとが遅れ出し
離婚してお師匠さんは若うなり
一本の桜へ隣保寄って飲み
愛人へころころと夏みかん
四ツ玉へこれはどうもと返えしとき
奥さんも二号も眼鏡かけてはる
座りだこ妻を此んなに座らせし
もう二人来るとタクシー苦笑させ

神戸市　野村初甫

大掃除こけしバタ〳〵〳〵こけたまゝ
メダカの様にマヽについてく子沢山
鯉のぼりパパがこっそりはいれそう
大ジョッキ女も前にデンとすえ
借りたのは返し貸したはよう取らず
嫁ぐ娘があるのに日掛けさえ追われ
別嬪に写してやとは無理を云い
子沢山だから洗濯機が買えず

大阪市　金井文秋

女房より悪い芸者が来て並び
惚れきらず生活力へ探り入れ

岡山県　池田古心

礼金が馬鹿正直の痛に触れ

東京都　石居高志

割切ってみたがアバンはアバンにて
羨し映画の恋はもう結び
たばこなど買わんでも済む役につき
泣けと言う意味がつれなく男去に

岡山県　坂手有子

恩給を貰うて仲人して歩き
酔狂は奥様ばかりほめちぎり

岡山県　土井雷山

志願者が持て来る箸の桜鯛
鯛もよし金もまたよし教祖様

大阪府　早川清生

管楽器一息吹きに起ち上り
男ばかりで十二時にめし食えず
畠から見る勤め人もう帰り
棚を吊ることで新郎みくびられ
アパートに風呂行くだけの下駄を置き
社の寮で再婚旅行すまされる
新妻にやたらに着替えさせられる
店しまうように結婚解消し

小松市　伊藤茶仏

帽子冠むれ冠むれと禿を妻かばい
爪を切る爪の脆さに老いを知り
箸を割る手つきに老いは争えず
お金持ちだから慶応の帽子きる
秀才に冠るサイズがないのなり
拳銃があればギヤングもやり兼ねず

大阪市　西田柳宏子

母の日に母忙しく気疲れし
花よりも人の流れを通り抜け

堺市　辻圭水

他人の慾だけやたらに目について
ネクタイを妻が選んでつつがなく

善通寺市　松岡委滄浪

金歯だけ浮世へ戻す灰を掻く
恋愛をイロゴトなどと親仁いい
くど〳〵と訊いてサクラが一つ買い

石川県　中松恒雄

気の強い女の裸痩せており
大根の漬け方知らぬが花は活け

高知市　有友玲羊

御無沙汰へ恋をしてますとも言えず
日専連高知大会雨中行はる
名物の雨にも感謝とは皮肉

高知県　建沼康之介

三十の不安彼氏の予備があり
他の用で来ました顔で質を出る
連名で出したに女へだけ返事
女房に云うぞは一杯飲ませろか
二次会に移る頃には来て坐り
信用の限度でマダム催促し
母の日の母乗り物へしりごみし

高知県　明神耕生

咲く迄を待てず造花に酔いつぶれ
退院へ婦唱夫随の日が続き

滋賀県　中島可十

ひよっとして好いことでもと宵を出る
男舞い暇とお金を食った舞い
官費もう超過をしたで宿を替え
採用に明治生れが小さく居る

新川柳鑑賞

麻生路郎

〔二八六〕

今度こそひよつと効くかと加美の素　（文　秋）

若いのに禿げてる人もいるが、いつまでも黒髪がふさふさしている筈のものではない。いつのほどにか薄くなるし、ひたいのあたりから禿げて来て急にあわてている人もいる。顔と頭の境界線がハッキリしないのですくなからず悲観している人もいる。毛生液の広告が目に入ると、効かぬと、知っても一度は買うて見るのも斯うした人達である。この句も、そんなところをねらったのである。近ごろ加美の素がさかんに広告しているのでこんな句が生れたのであろう。人間の弱さを巧みに描出している。

〔二八七〕

送詞謝詞仲居はずらりかし こまり　（麦太楼）

送別会風景のスケッチである。送詞と云うのが型の如く行われる。別に惜しい人ではないにしても、一応は惜しむことになっている。謝詞と云うのが又型の如く行われる。しかし、この方は去るにのぞんで感無量の涙を流す人もいる。そんなとりやりの言葉が交わされる間、仲居さんはズラリと目白押しに並んでかしこまっているのである。光景が眼に見えるように詠まれている。

〔二八九〕

御援助の賜物ですをもう忘れ　（万　古）

この句を読むと微笑を禁じ得ない。いろ〳〵と世話を焼かせて、どうにか一人歩きが出来るようになり、これも「御援助の賜物です」などと云っていたのに、今では、あと足で砂をかけているのを見て詠んだのであろう。皮肉な穿ち句である。

〔二九〇〕

花の色は移りにけりな子を抱いて　（一　瓢）

その昔と云っても、そう遠い話ではない。曾てはあの女に対して心を動かしていたが、遂に談す機会もないうちに、他へ嫁してしまった。その女にフト出会ったら、もう子を抱いていたが、以前の美しさは消えてなくなっていたというのである。「花の色は移りにけりな」の引用句で、複雑な味を出している。

〔二九一〕

根が生えた様に動かぬ露天商　（花　村）

人生の底を歩いて来た人が露天商として路傍に尻を据えているのを見ての写生句である。いつ売れるか判らないような品を並べ、根が生えたように黙々として動かない。世の中には斯うして生きている人もいるのだなァとしみ〴〵と思わされたのであろう。

〔二九二〕

でも社長さんと怒らす事を云う　（日　満）

でも社長さんと、社長の意志に反することを云うのも若さばかりではないが、社長は社長の意見がある。社長は決してウンとは云わない。サァ、その意見に、時代のズレがあることを正面から指摘して、でも社長さんを繰り返えすのである。怒らす内容は具体的に表現していないが、労資対立の一コマを「でも社長さんと」いう言葉で想像させるところが妙である。

〔二九三〕

夫婦愛あんな怪我でも附添われ　（方　正）

「あんた大丈夫？」
「痛い〳〵」
「しっかり、わたしの肩につかまっていらっしゃい」

と、夫を抱きかかえるようにして、長い廊下を蟻のように歩を運ぶ。外聞も何もないところに夫婦愛が盛りあがっている。作者が医者だけに、大した怪我でもないのにと思うと、斯うした夫婦愛を目撃してほおえましく感じたのであろう。

〔二九四〕

經験は尊とかろうが又振られ　（草一郎）

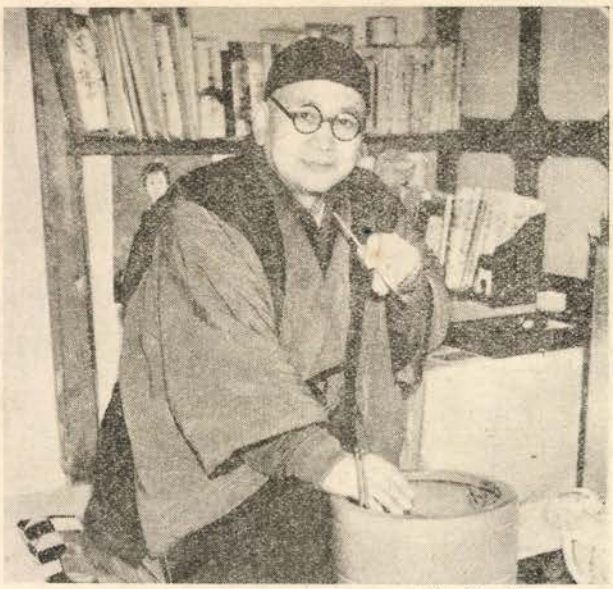
皮肉な自嘲句である。「又振られ」の「又」がよく利いている。失敗は成功の母と云われる。いくつかの失敗を積み重ねてゆくうちに成功をするものであるが、女に振られた経験ばかりは苦笑ものである。「経験は尊とかろうが」とは何んという皮肉な言葉であろう。

かるいペン先
あかるいペーパー
川柳雑誌社特製
投句用　柳　箋
一冊（五〇枚綴）三〇円
送料　入円

御贈答に
大丸の商品券
三百円～一万円
京、阪、神三店の他
高知、鳥取、下関、
別子、博多に共通！
一階　御堂筋側
大丸
大阪心斎橋

川柳家の二十四時（2）

諸氏夫の真夜中の夢から、晩酌の鍋子の数や食卓の皿の中まで覗かせて頂いた。諸先生の生活断片として後世これが貴重な文献となるかも知れない。 ―編集局



松山市 前田伍健

★一時――★五時　十三時頃から続く胡蝶になって飛び廻った若い時の夢、極楽にいる旧友知己の夢など見たり、見なかったりあゝおしい夢、夢でよかった夢など時々、その他はぐっすり寝る。夜が明けて、イビキがどうの、寝言がどうのといわれる時もあるが、それは困る。

★六時　起床、庭を一まわり、雑植庭である。私は見るだけで手寸掃除、ラジオきゝつゝ新聞三四へ目を通す、句が浮かんだり生れてくる、四五句出来る。

★九時――★十七時　自動車学校の先生として（十一年勤続ですぞ）週二回位い行く。これから放送局関係、来客、会合、通信処理と、閑な時は揮毫、川柳誌入れはせず、木剣などを振って見る。

★七時――★八時　机上尺辺の一其他勉強、義理を立てたり、又欠いだりお医者さんに叱られに行ったり、何やら彼やら判らぬ浪人、老人、閑人、忙人を団子にした、不規則の規則ある伍健生活、三十尺坊（たぬき研究）生活が、毎日平均して五時頃まで回転出没現消する。おせわしいでしようと言う人、いゝですなと、いう人、自分では楽しかったり、くるしかったり、判らぬ時間が続く。

★十八時――★二十時　この頃やっと、あっさりした晩飯で、時にはよいお菓子と茶で、くつろぐ、作句、読書、研究、耳（ラジオ）目（読書）口（うまいもの甘党の）手（エンピツ、万年筆）足（組んだり座ったり）

★二十一時　ぼつぼつ疲れてくる室内はタバコの煙もうもう。

★二十二時――★二十四時　どれ寝ようと枕元へエンピツ、手帖を置く。今日もタバコを七〇本のんだ、不経済で不衛生と自分を叱り、しかし四十代迄は一日二七〇本のんだのだから、少くなった。年が寄ったわいと、うとうとする。

★

★一時――★六時　（答えなし）

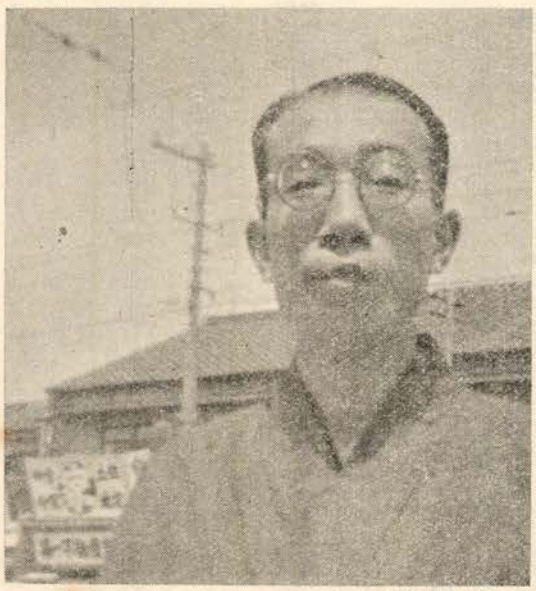
★七時　七時頃目をさまし、朝日毎日の朝刊を床の中で読み、七時半起床。ハミガキはグリーンサンスター、家族が多いので九五瓦家庭用が一カ月に二個いります。たばこは一日十四五本、出勤前に家で二本、病院で十本帰宅してから寝るまでに二、三本というところです。句会でもあれば、もっと多くなります。

★八時――★十一時　朝食は米食味噌汁と生卵位、八時半出勤、市電又は市バスで病院着は九時前、九時まで出勤簿に捺印することになっています。九時半から診療又は廻診開始。午前中外来日には四、五十人、廻診は百七十人程の入院患者を三日に分けて診に廻ります。

★十二時　お昼御飯は病院の給食三十円也。

★十三時――★十七時　一時半から午後の診察が始りますが、小生には午後の外来診察はありません。たゞ病室の重症患者を診に行ったり、病気のことで病人やら家庭やらの相談。日によっては看護婦学生の講義、外来患者の受付が三時までで、三時頃には診察も終るので診察をしていない。小生も一息。四時には風呂がわくので、身体についた細菌類を洗い落して来る。五時迄が比較的用事のない時間だがさて作句も出来ぬ。

★十八時――★二十時　六時迄には大低帰宅。銭湯へ行くこともいらないので、直ちに食事。大低お酒をのみます。一級酒、二級酒、ウイスキー、ビール何でもよろしく、酒は一合程度、ラジオは丁度子供の時間で子供らと聴きながらの食事。七時前に



大阪市 北川春巣

敦賀市

船木夢考

は終って此頃は二、三十分の散歩。帰って来ると、子供らの勉強の邪魔にならぬよう、ラジオは一切かけず夕刊を読んだ後は医学雑誌やら医学書。

★二十一時—★二十三時　九時には寝床に入って、そこで三十分位川柳の本を読み、興が乗れば作句　九時半から一時間位、此の頃は大菩薩峠（角川文庫）を読み、十時半消灯。大菩薩峠は月に二冊発行されますが、新刊が出る頃に丁度前のを読み終る程度です。

★二十四時　要するにサラリーマン医師の平凡な一日一日です。会などへも日曜の外はなるべく出ないことにしております。

★

★一時　昨夜から麻雀に来ていた三人が去ったので一時四〇分床に入る（妻は麻雀に一人多いので拗ねて十一時ごろ床に入る）

★二時　床の中で吉田機司の酔筆「やぶいしゃの頭」をよむも三〇分もして眠る。

★三時—★四時　睡眠中

★五時—★六時　犬ベルが小便したいとて泣き出したので起きたついでに鉢の朝顔へ水をやって又床に眠る。

★七時　床の中で新聞二、三よむ毎日柳壇「停年」がふと目に止まる。

★八時　床の中で「ふあうすと」「あさひ」「ねぶた」へ出す句十三句作る。

★九時　起床してトーストと野菜サラダにコーヒとジュース、玉子焼を朝飯に食して、庭のバラ社若の花の中て体操する。

★十時　福井療養所から依頼の選句するも川柳らしきものなし。添作加筆するも嫌になって結局没にする。

★十一時　柳社から頼まれていた随筆三枚と五枚もの二つ書いてかなり疲れる。

★十二時　昼飯は蜆汁、箸を放すと直ちに随筆のつづきを書く。

★十三時　今朝来たハガキの返事を書く、ハガキ三十五枚封書二通、久留美が小生の金沢行を待っているらしい、七月十五日に行くと返事を出す。

★十四時—★十五時　床に横になって「世界」と「中央公論」の創作をよむ。

★十六時—★十八時　入浴に行き帰宅して机上に向う、川柳句作するも二、三句より出来ず断念してピース三本喫う、それでも出来ぬ。何もせずに机を前にしてぼかんとしている。妻と五目並べをして負けたので将棋で負かしてやる、しかも飛車落、勿論こちらが落してやるのである。為念。

★十九時　犬をつれて妻と街へ運動のために散歩に出る。生ビール大ジョッキは私、妻は小ジョッキ。

★二十時—★二十二時　帰宅すると麻雀の連中が三人と将棋の対手が一人来て待っている。麻雀は妻にゆずって小生は将棋をさす。

★二十三時—★二十四時　一人の友人が去ったので小生已なく麻雀に入る、二荘して相かわらず小生（一）二、七〇〇点なり時計を見ると今日も十二時をすんでいる。

★

★一時—三時　起きていて、選をしている時もあります。新聞柳壇は締切があるので追ったてられます。（戦時中からこの方、夜の汽車には乗らぬ事にしています）

★四時—★五時　このころ、時々眠がさめます。読書（新聞を含む）することが多いのです。時によると八時頃までつづく。

★六時　いつも完全に眼をさましています。

★七時　歯磨、石鹸このみなし。茶漬がきらいです。

★八時　週、三四回福助足袋へ午前中出ます。

★九時—★十一時　内に居る日は選句。返信。執筆。

★十二時　福助へ出た日は帰る時刻。内に居る日は選句や執筆。

★十三時—★十七時　一定せず試写会、会合　催に出ることあり、映画芝居家族と昼間行くことあり、選句、執筆すること多し、遅延、違約申わけなく、あり。タバコを喫わぬから気分転換にはウイスキー、パチンコ（三十分）、庭を行き来する、効果あり。

★十八時　句会に出る。一定せず

★十九時—★二十時　内に居る日は夕食の時間。（晩酌せず）

夜の机の仕事はあまりしません

★二十一時—★二十二時　この時分腹が減って来て必ずそばか何かを食べます。

★二十三時　大抵寝ます。

★二十四時　起きて選をしている時もあります。

大阪市

岸本水府

山陰川柳大會

於『児童会館』

大会前夜祭

河村日満

いずも号ではるゞ〳〵、数十のトンネルを越して来て下さっている路郎先生夫妻のあとを追って、上井駅に着いた吾々大会準備員は、遙か彼方へすでに出てしまっている三朝行のバスをうらめしく見やりながら、臨時バスを待った。

何度も来た道ではあるが、大会を明日に控えての感慨は、山麓に立っている広告ですら懐かしく吾々を出迎えているかの感じで心たのしい。揺れる間もなく本日の宿である後楽に着けば、いつもの来馴れた部屋に路郎先生等も、今着いたという恰好で坐っておられる。

旅の疲れをこの街自慢の温泉で洗い落して、夕食までの一とゝきを散歩に出掛ける。川の中から湧く露天ブロ温泉で、子供達が相変らず戯れている風景は、特に旅の人には印象に残るらしく、先生も暫し見とれておられる。渡月橋に似せたという三朝大橋をしばし逍遙しながら、喬水君の上手な説明に、あの山や、この寺を見直しては、そうであったかとうなずく。宿に戻ればすでに山海の珍味は一同を待ちあぐねて、お銚子の出を待つばかり。春巣理事長を一緒に招いての大宴会の幕は、遂に日満の挨拶によって切って落され、よもやま話もいつとはなしに酒のうまさに、手拍子に変るころ。打ち寛いだこの場の空気は、ついに葭乃先生に春雨と夕暮を舞わしめる結果となり。八歩、鬼酔氏等によるのど自慢に加えて、三朝のきれいどころの三朝小唄に貝殻節と、滔々と流れる大河の如く十八番のやむ間もなく続くその中に、久米雄、雷山淡舟氏等の参加は更に興を供えて路郎先生の隠し芸発表とまでに発展して、これから益々というところであったが、吾々は大会準備その他の関係で迎えの車でお別れしたのは、返えすがえすも残念であった。

手を叩く芸で殿りまでつとめ　日満

とつとめたかったのであったのに。

大会寸描

大西八歩

前日、麻生先生御夫妻と、三朝の宿舎、後楽で明かした僕は、十三日朝八時過ぎ、大阪組の潮花、春巣、梅里、愛二、鬼酔の各氏、それに岡山の久米雄、雷山の両氏達と同伴で、鳥取から僕と一緒だった鳥取市観光協会の浅沼課長も共に三朝温泉を出発して、鳥取の大会場へ向う。十時頃鳥取駅着駅頭に出迎えの鳥取川柳会の各柳友達と談笑の裡に、祝山陰川柳大会と大きく書かれた日ノ丸の貸切バスに同乗して今日の会場の児童会館へ急ぐ。

会場は早くも各地から馳けつけられた柳人達で一杯となり、篠山の無鬼氏の顔も見える。弓削の七面山氏の顔が笑っている。米子の美笑氏が側へやって来て強く握手される。何かしら目頭が熱くなる。玄関では受付の椅子に地元の湖山、耕民の元老。油の乗り切っている法泉子さんに、茗人さん、喬水さん。新進気鋭の三歩、多可志、遊星さん、病気を押して出席された芳道さん。それに川柳が飯よりも好きと云う天保銭さん、粗粒さんも達も控えていて、遠客へのサービスに万全を期している。

昼食の時間を利用して会館前庭で鳥取名物の傘おどりが始る。路郎主幹始め皆真剣な眼で終り迄興味深げに観ていられた。踊る方も見物人の真面目な気持が通じたものか終始力がこもって仲々の熱演である。

午後一時頃開会となって我等のホープ河村日満氏が立って諧謔を交えた名調子で会を上手に進行させて行く。

僕の挨拶に続いて市の代表として観光協会の浅沼氏、後援会代表として、日の丸バス営業部長の加島卜天氏、短歌「情脈」の主幹枝野登代秋氏等の祝詞があって、最後に各地から寄せられた祝電が読み上げられた。

麻生路郎先生の講演が始まる。先生の眼に映った鳥取は折角豊富な温泉に恵まれていながら、市民の宣伝不足からあたら宝の持ぐされの感があるように思われ、温泉マークも天然の温泉と知る大阪人はわずかしかなく、先生御自身も此の度来て始めて知った由である。尚作句は明るい気持で詠むように、そして川柳人は朗らかな毎日を送るように力説された。先生の講演は満場の人々に深い感銘を与えた。

次に席題及び兼題の被講に移る。十六名の選者が次々檀上に立って、名句を読み上げられてゆく。机上高く積まれた賞品も入賞者へ万雷の拍手の裡に手渡され、こゝに意義ある山陰川柳大会の幕を閉じたのであった。檀上に飾ざられた元川柳雑誌社鳥取支部長故中島鉄州氏の霊も今日の盛会を喜ぶかの様に思われた。

尚路郎主幹御講演前に加島卜天氏令嬢により贈られた花束は御夫妻の長い川柳生活へ文字通り錦上花を添えた。

傘踊(カサオドリ)と砂丘観光

増田耕民

傘踊が鳥取の無形文化財で有うことや起源が百姓の雨乞いに由来する云々の伝説はさて置き現実的にあの土臭さゝと素朴其のものである姿形、昔ながらの伝統的郷土色の表現を京阪神山陽の川柳人の眼前に展開したことは実に予想以上深遠であったと思う。

川柳人の眼にじかに傘踊を紹介したこと自体鳥取市の宣伝上将来大いに役立つと思う。大体に川柳人は通り一偏に目を楽ませるだけで御承知出来ないものである。何か其の裏の裏迄ピンとしたものを各人各様頭の内に一種映像的に感受し何かの機会に必ず句として表現する。其の句を通じての宣伝価値は一時的なものであろうか。

選句披講、賞品受授もとゞこうりなく終って、愈々砂丘行きと云うことになったが、生憎く空模様がわるく、砂丘を雨で濡らさぬようにと祈願しつゝ、一同バスに乗り込んだ。大砂丘は既に見つくして居る人もあるとは思うが、大会の空気に包まれて見る砂丘は又別な風情をかもし出すものと期待したのに、惜しい哉、遂に雨が降り出して存分にそれを味うことが出来なかった。然し覚寺峠の新緑は雨に洗われてひときは鮮かに車窓を濡す。雨の雫迄緑に染められて居るのも初夏らしいすがすがしさである。砂丘の雄大さを繰り展げる前奏曲としての山丘地帯の起伏も細雨煙る中に見れば一入り面白く、バスのガイド嬢（八歩氏の令嬢）の美声で懇切な説明もそれに興趣を添える。霊場摩尼寺の山を遠望にやがて蛇身に化したお種姫の伝説を秘めた種ケ池の上の道に出る。池水の凄味を呈した青さ、其の周辺を繞ぐる山々の新緑は渾然一体砂丘の白砂と対照的で目をみはらせる。池は突き出した弁天宮の森、これは其の昔池中の島であったと云うことだが今は陸続きになって居るのも印象的である。やがて雄大な砂丘の一歩手前と云う所で路巾の関係上停車す。雨は益々降り続いて居るので車から降りられない。それでもナイロンの風呂敷や防水レインコートで若干降りて行きかけられた人々も寸時で逆戻りと云う始末、やむなく其まゝ雨の砂丘に名残りを惜しみつゝ引き返す。三朝小唄調の

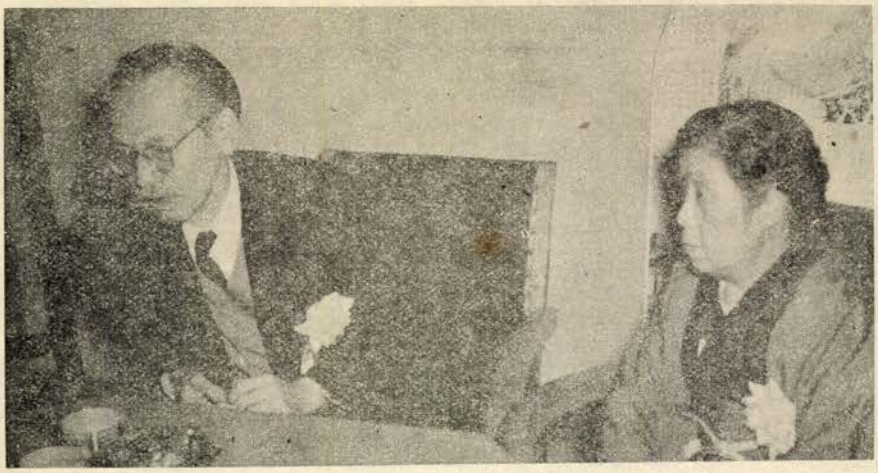
砂丘で泣けば雨雲せまる
せまりや砂丘が砂丘が雨でぬれ

懇親会

杉谷湖山

川柳大会も盛会裡に無事終り暮は転じて懇親会場へと移る。百になん／＼とする柳人は二台の観光バスに分乗して白兎荘（白兎神代より伝わる其の名もゆかし）へとくり込む。開会までの暫しの時間を利用してそこの温泉（市街に湧く二十を数える温泉は鳥取の誇るもの）に浸り、今日の句陣の汗と鳥取砂丘の細砂を心ゆくまで洗い落せば、午後六時準備万端OK、麻生両先生を正座に迎え全員着席されるや鳥取柳壇の誇る河村日満君立って両先生を始め各地先輩柳友諸氏の川柳大会に寄せられた絶大なる御協賛御協力を戴いた感謝の辞を述べ終って一同祝盃を高々と揚げ懇親会に移る。

小西無鬼氏をリーダーとする篠山の女性群との混成部隊は手振身振りもあざやかに名物デカンショ踊りに満場の拍手鳴りも止まず、次から次きと御国自慢に花が咲き緑之助氏が本場安来節の名調に出雲柳壇を代表されるや米子の美笑氏の勇壮な剣舞が飛び出しやんやの声、地元八歩氏の美声名調の端唄に茗人氏の中国情緒豊かな奇術。梅里氏の円熟せる喉に潮花氏の舞踊とさすが大阪勢なるかなの感深く、葭乃先生の舞踊たるや天下一品の語に尽き、恐縮ながら御若い頃はさぞかし艶やなるであったろうと思われる。更に何んと言っても今日の圧巻は路郎先生の野崎詣りの踊りである。鉢巻姿に船頭の櫓を漕ぐ動作に至ってはユーモアたっぷりの至芸正に天下の珍品ただ／＼感歎久しうするのみであった。夜の更けるを知らず明日の再会を約し鳥取川柳会の万歳を三唱し、先生御夫妻を宿舎（小銭屋温泉旅館）にお送りしたのは既に夜十時を過ぎていた。



・写真説明・

日本海新聞、山陰ラジオのインタビューに答えて（鳥取を語る）の路郎・菅乃夫妻

「ホテル」

麻生路郎先生 選

ホテルのベッドでも剣豪伝を読み
バイヤーが泊りホテルは活気づき
借金をするのがホテル予約する
お食事だけよとホテルへついて行き
つけ髭なもがれホテルで逮捕され
名ばかりのホテル他人と襟越し
懐中を数え直しているホテル
ボーイ入用大学卒とあるホテル
外遊のホテルは雲の上を飛び
又異う女とホテルから出て来
ホテルでも女の好きな物を食い
アベックで来ればよかったホテルの夜

春巣　同　英断　香林　雷山　同　久米雄　葵邱　流風　磯千鳥　敬一（住）人力車と酒落て金髪ホテルを出　茗人（住）ホテルの灯男の方がおじけずき

GIの軍靴のきずがあるホテル　雄々（住）ハネムーン山のホテルはまだ明けず　晴の助
わからないはずよホテルにや小さ過ぎ　文平（住）ホテルまで蹤いて来てから気が変り　宇柳
新妻にちと多すぎるロビーの目　恵（人）女もうホテルの勝手知っており　鉄児
三朝一のホテルと少し吹いておき　淑　満（地）観光のホテル鯉も飾っており　葵邱
日本に居ても英語の要るホテル　ひか平（天）殺人のホテルひとこと灯をともし　久米雄
母親にホテルはくつろげぬところ　法泉子（地）団体へホテルも格を下げて貸し　寿男
ホテルでも呼べば答える部屋に秘書　東岸子（地）ホテルでも日本の酒で押し通し　路郎
お芽出度の両家にホテル貸切られ　貞女　同
出世した子に連れられて来たホテル　克平（人）ほろ酔の父のお箸の鯛の鯛　香林
スナップのホテル泊ったわけでなく　けん坊（地）隣席も鯛には箸をまだつけず　晴の助

麻生路乃先生 選

ホテルとは名ばかり車道入らない　同
「鯛」
ほろ酔の父のお箸の鯛の鯛　香林
隣席も鯛には箸をまだつけず　晴の助
ホテルでも女の好きな物を食い　寿男
ホテルの灯男の方がおじけずき　清一　李明（天）折詰へ鯛は同居をせぬ姿

（以下各地柳壇で発表）

夢でよかった夢で吐息をする夜中静か

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

僕の寝像がどうあろうと朝が来る　愛媛県　村上　旭童
飲みませうといふ大杯に酒がきれ　同　同
下肥の傍で一服吸いつける　同　同
四ッ玉の様な女に草疲れる　同　同
失業をして百姓の良さを知り　同　同
晴耕雨眠たの五ン兵衛で終る気か　同　同
辛子振る手付で知れるうどん好き　郡山市　藤田　凡々
酒飲めば話せる男金を借り　同　同
雑音のないふる里に落着けず　同　同
つまみ食いする爪美しく染めて　同　同
空想が愛してならぬひとといる　同　同
叱るつもりも拝啓と書きはじめ　貝塚市　阪本阿季良
母の脊で生保の子供よく笑い　同　同
療養所妻を見直すよい所　同　同
寄附帳へチョンチョンとして済しとき　同　同
鏡台へ御無沙汰してる倦怠期　同　同
青空がのぞき遠足手をたたき　同　同
補聴器へ借金取りの声が入り　同　同
掃溜の鶴が双親捨てゝ嫁き　岡山県　池上知恵美
丸尾潮花さんを迎えて
訪問へ藤むらさきに咲きそろい　同　同
惚れ切ってルージュがあぶ宵の風　同　同
大掃除すめばねずみも戻って来　同　同
扇雀と並べて見てる恋のひと　同　仲どんたく
花嫁が学士で花婿肩がこり　神戸市　同
芸無しの義務ひたすらに手をたち　同　同
なつかしのメロデーなんや若返り　同　同
春日は遅々たり金の無い日曜　同　同
定年へこれが最後の隠し芸　同　同
心配は起きてる間だけと言ういひま　兵庫県　辻　文平
繃帯は全治一週間には見えず　同　同
巡りくるものと信じていたい金　同　同
参考になるわとデパート見て歩き　同　同
千円もあればと妻の眼に出会い　同　同
臨終へカナリヤ派手に鳴きつゞけ　貝塚市　護川　梢月
妻の座がゆらぎ四十の美顔術　同　同
喋らせておいて紅茶の支度をし　同　同
目に青葉イワシのおかずにて候　同　同
金廻り良くなり病状悪くなり　同　小浜　牧人
芸名で稼ぎ本当の名で預け　神戸市　同
生字引と言われ乍らの地下主任　同　同
外廻りの御世辞も言えて御曹子　同　同
笑わせておくさと自信持っており　同　同
父の日に次男は如才なく映り　同　谷沢　好祐
六等身ですが和服はよく似合い　大阪府　同
ボディビルの様に欠伸を差上げる　同　同
乗り降りについスカートの裾をまり　同　同
痩せたいという一心が朝を抜き　同　同
満員車急なノッチでゆすり込み　同　国谷　散歩
第二工場こゝは赤字を埋めるとこ　米子市　同
愛情のもつれは知らぬ姫鏡　同　同

幸福を幸福に（八）

戸田古方

集中ということ

〝忘れねばこそ思い出さず候〟「紺屋高雄」の中の文句ときいていますが、なる程その通りだと感心したことがありました。昔の軍隊で「知りません」といわせず、忘れましたといわせたわけもわかるよう気がします。

人間忘却はあり勝ちのこと試験がすんでみんな忘れてしまうから新らしく習ったことが頭に入ってくるとよういうたものです。

不渡りを信ぜぬほどに信じ切り　生々庵

約手や不渡のことがとっくりのみこめないと御自分でいってられたことがありますが、信ずるものは幸せなるかなというところです。

誰にでもすぐに惚れると叱られる　竹荘

何でもわかったという人は何にもわからない人、誰にでも愛される人はその愛されかたが案外浅いともいえるのでしょう。

お一日信仰試す様に降り　無鬼

雨が降ろうが槍が降ろうがとい

旅便り不運の姉に気をくばり　同
通勤の恋かつぎ屋に割り込まれ　同
慰謝料の仏の浮かぶ線でもめ　同
光源氏読んでて恋がいやになり　大阪市　板東千代美
逢うた夜の泥濘下駄にまだ残り　同
躾糸逢いたい音で切れるなり　同
やっかいなものに出来てる男弟子　天理市　菱田　満秋
貰い物中味を見抜く程に馴れ　同
子沢山日向が足らぬ様に干し　同
医療扶助受ける自信のある不幸　同
育判に似た仲人の大皷判　同　西川　晃
真直にねられぬ程に母は老い　大阪市
三通話使って母が嫁の愚痴　同
メンデルの法則通り俺も禿げ　同
恋猫の御婦還渋々戸を開ける　同
案の定虎穴に入って食いつかれ　貝塚市　阿部かつみ
孤児嬉々カーネーションの日　同
日の丸を立てっぱなしの連休日　同
母の日イかいなと母は笑うだけ　同　永尾　英断
花が葉に変りポスター同じとこ　兵庫県
南無妙法蓮華経のように跳ね廻り　同
笑ったよ泣いたよ僕の子供だよ　同
ビルの灯が揺れてるような山の　同　橋高薫風子
水中花水に疲れしごとく病む　大阪市
赤いドレス着て歯虫のもの想い　同
思い出は散らす野の薔薇散ろう　同
蜘蛛が巣を繕うに似た屋根普請　同
尻込みをしてゝ油揚きらわれる　貝塚市　杉本　一鶴
ぐちっぽい男聞手が苦笑する　同
カメラもう花見ヌードショウ　同

カマチを突けばボクサーの構えなり　同　堀　須賀太
前任が惜しまれていて肩がこり　大阪府
機関車を上からアベノ橋の恋　同
くたびれた診察券で顔を売り　同
城下町こんな処に派手な橋　同
招待のナイフフォークに肩がこり　山口県
鳩の豆売っても食える観光地　同　安平次弘道
草花もきれいに見える新家庭　同
仲の良い小鳥を嫉いて夫待ち　同
スポーツの様に家出をした十九　大阪府　浅野　瓢太
日本髪さわらんといてと邪けんなり　同
継母がちよっと足らんで平和なり　同
コンコース団体客が占領し　同
更生のペタル青葉の風をぬけ　岡山県　小田　紫草
母さんのおさらえ子には飴持たせ　同
舞扇の様に孔雀は羽根を閉ぢ　同

撮影会にて

嘴みつく様な顔のモデ　同
がポーズする　同
ボロ箪笥母に臍の緒おがまされ　倉敷市　藤井　五茶
婦人欄ニキビの事にも智慧をかし　同
老いてなお夢婆さんのへそくり帳　同
ノイローゼ近頃天理教にこり　同
縁談が決り遊びでない田植　兵庫県　出口白猫児
五月雨へ案山子のように立つ釣師　同
三代の養子打切る子が産れ　同
しっぽからエビずし食べる覇気若し　同
ストもして勤労感謝の祭する　大阪市　池戸　桃村
大の男がタツタ百円貸してんか　同
縁談をことわってから左遷され　同
自動車で送り迎えはお隣さ　同

うところに神仏の加護もあるのでしょう。

生きのこる方の不幸はふせておき　方　正

死んだ方は美人でなければならず、死の勝利をたゝえる記事に読者がついて来ます。戦争中のこと、公葬にいってきて、赤ん坊を抱いた若い未亡人にばかり同情したといったら、長男を戦死させた老人に叱られたことがありました。

始末書にはっきり個性ぬけていず　半　休

半ば相手のいう通りかゝされる文句にまで個性のみえているところに生き甲斐というものがあるのでしょう。

生来の愚鈍、一時に二つのことが出来そうになかった私、アマチュアがドン／＼二科や帝展に入選するのを横眼でにらみながら、ろ

ヒゲソリ後に

アストリンゼンは世界的常識！

1 生々した男性美をつくる
2 爽快でヒゲソリがたのしい
3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力！

明色アストリンゼン

桃谷順天館

青空へ人間金のことでもめ　兵庫県　吉原　紅月
仕事しただけ提灯屋店に吊り　同　同
赤い爪先祖に済まぬ娘に育ち　大阪府　石川ひさみ
惚れてゐる嵩だけ金を貢がせる　同　同
銭亀と子を遊ばせて便り書く　同　土守トン坊
モク合っていても御亭主さんです　滋賀県　同
京の孫と田舎の孫にとり巻かれ　同　同
披露宴いつの間にやら髷をとり　同　本多　省三
臍くりへ足して貰って旅に出る　大阪市　同
酢昆布をしがむ船場のハイヒール　同　山本　立児
夫婦養子スピッツまでが不姓症　大阪市　同
どうせ来ぬ天の邪鬼をも招ぐ置き　同　小川静観堂
手入せぬ薔薇が今年も咲いてくれ　同　同
ライオンは居らず掃除を見て帰り　同　岩垣日本村
本石でない身を悔ゆる年四十　大和高田市　同
接吻の場面となって妻苦笑　伊丹市　同
午後休診重い患者でフィになり　同　同
カーネーションより袋せんべ喜ばれ　同　小田　柳叟
バラ賞めて貰い聊かいゝ気持ち　同　同
カステラに飽いてる十円が欲しい　同　徳永　貴美
天井を見せて剃刀磨き初め　同　同
ハイヒールにも似合ふ遠出の妓　貝塚市　吉田　凡茶
福祉から家の奥まで見透かされ　同　同
国会はもめてるそうな安静時　同　同
西部劇思う硝子の破れた音　奈良県　同
喋らせて読ませて待ったドライヤー　同　同
特級酒情緒とやらの桜散る　同　同
早寝した運動会が雨に明け　西宮市　同
狐雨傘さして行く河原町　同　同
親の眼を○△にして育ち　同　同

砂丘の起伏へ二人吸われたり　兵庫県　前川左文字
風紋を踏めば謎めく大砂丘　同　同
鳥取を誇る砂丘で妻忘れ　同　岩川　一貫
浪人をしてる間の保険屋さ　愛知県　同
食うためさ大の男が団子練る　同　同
頭痛薬工場頭痛のする匂い　同　同
覚悟して来たわと味なせりふ言う　大阪府　紫垣　三吉
手のすじがどうのこう飯が食え　同　同
妻子留守我家も広いなと思い　同　同
鯉のぼり昔のやつが威勢よし　兵庫県　前川　越山
消炭の様に女房はよく怒り　同　同
魂を砂丘において湯にひたり　同　同
出発へ柄にないけど握手する　大洲市　横田　放人
盆栽の様な男が会計課　同　同
世は金と言う女房に逆らわず　大阪府　青柳扇子仙
貯金だ天引だわが家の自衛隊　同　同
法廷で争うまでもなく別れ　同　金子　紀人
妻よ有難う今日から白い靴　同　同
ハイヒールアクセサリーをみんなつけ　岸和田市　前川　越山
往復のない人生をすねて居る　同　同
徴兵のない青春をボディビル　同　下岳　周村
残高のない通帳も想い出に　東京都　同
セパートと歩くも見栄と云う夫人　同　同
小説にまとめてみたい過去の恋　同　北村　三歩
栄転の見送り役所空にさせ　鳥取市　同
税務署に見せる帳簿を見せてくれ　同　同
金のことやったらと先手に断わられ　同　太田　蓑流
つけうまをハイヤに乗せて子が戻り　岡山県　同
観光のお客へラムネだけが売れ　同　同
温泉が近いと左遷には触れず　同　同

くすっぽ絵の勉強も出来ぬうちにすんでしまった学生時代、損ばかりして親父に叱られ通した商売人時代、意を決してこれならやれると飛びこんだ教員生活も、私の絵は未だにものになりません。趣味と仕事の使いわけをするという器用さを持ち合していませんので、絵をかきながら、というより絵をつかって歴史の講義を試みているのが私の今日ごろ、仕事が楽しいのか楽しいから仕事が出来るのか、とにかく私の生活は極めて単純で、一本なのです。やっとこれで人並みとはゆかぬまでも人間のような生活をさゝえているのです。

この川柳だって趣味じゃありません。講義内容の要約というかエッセンスの発見の訓練の場なんです。

とにかく不細工に出来ていますので、人生五十年なら七十年、七十年なら九十年、生きんことにはものになりません、だから聖徳太子のようにあれをしながらこれをするというような人をみるとけいべつしたくなることさえあります。

勉強しながらラジオをきいたり、スクーター乗りが耳にイヤホーンをはさんでいるのを見るとひと事ながら気がもめてしかたがありません。

写真の流行からよく「絞る」ということばがつかわれていますが、一つのことに専念するなら、

若い子と飲むのがすきと言う老女　大阪市　半田・夏生
関心があるのか世話が行届き　同　同
臨終へ医の限界を敷きつつ　同　木村よしを
母の日も職安へ行く世相なり　奈良県　同　同
母の日とはたった一日だけですか　同　野田　一念
花見酒博士もデカンショ歌ってる　同　同
盛装をすれば出戻りとは見えず　倉敷市　仲谷ハナ子
想像にお任せしますと悪びれず　同　同
ゴールデンウイーク萎びた財布にはにけり　同　中川　堯二
洗濯機だけ欲しいよと母の老い　大阪市　同　永田都詩子
車中では岩波だけを読むに決め　同　同　星川　陽石
スタイルブックジュニヤスタイルばかりため　同　同　加川　靖真
姑は嫁のテレビで気に入らず　今治市　同　塚脇　笑太
仕合せを逃がした話だけで老い　大阪市　同　武田　宏
今日も来てるサクラのおばあさん　同　同　景山　素生
百円の浴衣サクラの方へ投げ　玉野市　同　山本　桐生
車窓もう故郷綺麗な麦の色　同　同　岡田百合子
生理日のママへ父ちやんさからわず　山口県　同　同
妥協しておこげ半分食わされる　同　同
不渡りの家の屋根にも鯉のぼり　同　同
涙金とは勿体ない御下賜金　京都府　同　竹内花代子
見る目には雑草でない子沢山　同　同
いゝとこは掃除が好きと父兄会　尼崎市　同　藤本　千永
第三者十人並で良いと云い　同　同
小雨なら決行しますランデブー　米子市　同　山根　素瓢
能面のように黙った倦怠期　同　同
療養は窓の近くに居て古参　滋賀県　同　児島与呂志
枕下が賑かになって病いたにつき　同　同
夢で見たとねだってやっと買い　岡山県　同　岩原　箔川
青畳足袋の汚れを気にして居　同　同　青木　徴酔
定年に近く仕送りまだつづき　大阪市　同　淵川　秀敏
変らぬ若さそれは子のない故に　大阪府　同　小島さぎす
学会の権威で患者ほっとかれ　同　同　舟木与根一
父さんの趣味パチンコとも書けず　山根　同　仲野花鶴美
国宝になり貧寺が幕を吊り　鳥取県　同　越知　義人
おとなしい嫁が育児の歌唄い　同　同　平田　実男
此処に又人生があるトルコ風呂　大阪市　同　田中蛙眼子
バスの揺れ車掌の声も揺れている　同　同　津田乃武康
如才ないえくぼの酌で酔いつぶれ　宇部市　同　冨永　建朗
粗品進呈マッチばかり呉れ　同　同
君が代へ音痴合唱はばからず　呉市　同
働かぬくせに胃袋こき使い　同　同
バラが咲く迄はたのしい朝を持ち　熊本県　同
花趣味に持てば裕福そうに見え　同　同
小鳥にはこべを摘んだ試歩の道　貝塚市　同
釘をうつこともうれしい回復期　同　同
声色を真似て女房の気をほぐし　松江市　同
母がないので妹がさきに嫁き　同　同
年頃を叱るコツを習うて来　天理市　同
春風が飛べ〳〵すすめの子をゆすり　同　同
二日酔男の世界勝手過ぎ　今治市　同
母さんの馬鹿々々好きな人がありハイヒール彼とのバランス考えて　宇部市　同
みせたがる程でもないのを連れ歩き　同　同
清らかなまゝで別れてホットする　鳥取県　同
吸いさしをあさり日曜まだ寝る気　貝塚市　同
桝席の口口みんなよく動き　貝塚市　同
にくんでも見笑っても見た失恋を　同　同
喰うだけが楽しみだとは淋しいね　愛媛県　同
噂ではおれも相当もてるらし　同　同

誰だって案外すばらしいことが出来るのじゃないかと思われます。通用しないかもしれませんし、今時、時代おくれかもしれませんが、こんな人生観がだん〳〵イコジになって来そうです。

学生時代、商売人時代には自分に自覚された個性というものが出ませんでした。先生をはじめてから「ずい分気まゝになりましたなあ」とうちでいわれているのですが、この気まゝが本当の私なんでしょう。気まゝが露骨にふるまうのと歩調を合せるようにいろ〳〵の苦労にもぶつかりはじめました。

親の財摺って世間と云うを知り　草一郎

私もその一人なのでしょう。

人間の弱さが損なくじも引き　潮花

損をしようが得をしようがほっちっちと時にはいゝたくなるのですが、とにかく自分で樹てたプランの通りに実験してみて、いろいろの経験を積んだことは有難いことでした。

借金のない猿の夫婦を見てかえり　妄夢

見るだけでなく場合によっては猿になってもよいとも思います。

政治論で勝ち注文をとりそこね　香林

あえて注文の一つや二つは、芸術は長く、人生は短しです、やっぱり私はきまゝものかなあ、

政治家で売れず仲人して暮ら

プラトニック一泊旅行も連れが（岡山県西大寺市）　岡崎　一也
ペン〳〵草繁って旧家閉ぢたまゝ　同
わが道を行けばへんくつに扱われ（神戸市）　傍島　静馬
父と子を遊びに出した子供の日　同
野心まだ捨てず知性も捨て切れず（大阪市）　丹波　太路
母様のアホーと母を尚慕い　同
一生に一度を出して金を借り（河内長野市）　森本黒天子
借り着して義理をかゝさぬ人でいる　同
いい夢を見たい枕の向を変え（岡山県）　殊井　夢川
胸病んで窓口迄の見舞が来　同
夢でさえ善人の枠を出ぬ生活（出雲市）　石橋万古人
蜘蛛の巣の一つ一つに春の雨　同
湯加減を姑に問わす持参金（高槻市）　渡辺　苦楽
抱かれる予感に恋をそっと閉め　同
放射能忘れ花見の酔心地（今治市）　小笠原青女
梅つける妻の姿に老を見せ　同
往診に来て茶腕も診断し（出雲市）　釜田　坡青
夕焼ておたまじやくしのあわてようのら犬の自由がほしいベットバス（玉野市）　同　則田水鏡子
泣けるだけ泣いて得心しましたわ　同　笠原　亀庵
子の石碑西陽を暑いとも云わず（倉敷市）

方大氏辞任、万古氏入院

羅針盤故障で航路惑わされ　同　藤沢不二郎
愛犬の恋に戸迷ふ娘の目付き（倉敷市）　同　野口卯之助
蕾が出来てあわてゝ肥しやり　同　島崎　秀保
ひとなみに化粧がしたいおてもやん（宮崎市）　同　藤田　博人
泥臭い訛が抜けぬおてもやん　同　松永　恒青
静脈を出せばヒロポン打った色（高知県）　同　佐藤龍山坊
膝に猫のせて孤独の本を読み　同　山田スミ子
出る釘は打たれる等とうぬぼれて（愛媛県）　同　久家代仕男
かけられた水鉄砲の春の水　同　木下　一休
泥はねてはねてタクシーよく稼ぎ（金沢市）　同　八杉　風車
鍬だこへ火種ころがす麦が延び　同　須藤　俊江
ダムサイド補償がホテル建ち並び（岡山県）　同　越智　一水
父の替ズボン息子がはいて行き　同　佐野蜃気楼
うどんで済ます二人の清い恋（広島県）　同　荒木　狂風
回診へスリッパーの音派手な事　同　萩原　竹郎
乾杯へ下戸が一番先に立ち（平田市）　同　広瀬我利婆
延長戦になってコーヒー追加する　同　鈴木村諷子
挨拶は抜きにしましょう見舞てくれ（和歌山県）　同　岡田　梅林
花疲れ癒す晩酌も又よろし　同　正口　辰始
寄附帳に我が家の暮し覗かれて（安来市）　同　杉本たつよ
美田など残さぬことに理屈づけ　同　鳥取　周甫
やけくそに雨の連休歩いてゐ（高知市）
虫干しへ思ひ出あってはかどらず
洗濯のあわ新婚は派手に立て（今治市）
みの虫の御機嫌糸を長くたれ
シャンソンの方がお好きなしゃれた（神戸市）
大物を釣り上げ失業苦も忘れ
悪友が妻の賛成先ず求め（倉敷市）
スクリーンも隣りの二人も気に懸り
アベックのボートは遠く浮いたまま（群馬県）
生き残り平和叫んで戦記かき（大阪市）
帯だけは金と銀とをちりばめて（鳥取県）
共稼ぎ先に帰った方が炊き（天理市）

大原にて

伝統を護る大原女もパーマ（大阪市）

潮花先生を津山に送りて

汽笛まで憎らしくなる別れ（岡山県）
親切と言うのも矢張り金次第（岡山県）

し

「焚くほどは風がもてくる落葉かな」でまさか餓死もいたしますまい。

勝手なお喋りの材料に高吟を引用させていたゞき失礼いたしました。川柳雑誌三四八号第六頁、（川柳塔の第一頁）をよみながらの雑想、巻頭の師の一句を締めくゝりに拝借させていたゞきました。

路郎

木の芽峠に
杏園翁の画趣

安川久留美

本誌の前理事長たる中島生々庵氏と懇意で、更に主幹路郎氏とも交誼久しき木村杏園先生（北陸道南画の大家）から揮毫のまゝ雲ばんによきみつ画を送って頂いた。氏とは恐らく三十数年けいがいに接せない。偶に郷里金沢へ帰らるゝ事があっても年に一度か二年に一度ぐらい、却々お目にかゝる機会はないのである。先生の高弟山科杏亭氏には時折会うて往年を談る。さて私の手許に拡げられた彩筆は「木の芽峠」と題し、別紙に左の説明の稿を添えられ、実に郷里につながる画趣あふれ、斯うして杏園氏は七十の齢を越しても郷愁には少年の修学旅行と変らず画題をものし「旅人」というセンチな気持を有たるところに涙ぐましくなった。

×

私はきょう五月三日の旗日に百万石祭りと重なって尾山神社の野外能見物に誘いをうけたが、それよりも『新樹の木の芽峠』の画を

乗らぬ身は特急待で腹を立て　兵庫県　野呂　忠
放浪の旅と別るゝ養老院　熊本県　永松　道雄
コンスグレー世に評判の歌を詠み　香川県　香川　雅人
虫歯の子虫歯の作文入選し　石川県　松高　秀三
姉さんは出来たと教師に叱られる　岐阜県　加納　幸児
鶴の一声を鶏不服なり　香川県　今田　蛙柳
けちんぼと云われる程に溜めもせず　石川県　高瀬　幸路
ノイローゼやはり薬はアルコール　大阪府　山河頭光亭
泣かす丈け泣かした後のカーネーション　大阪市　米浪進之助
へそくってカメラ夢見て早や二年　岡山県　谷本　一春
白粉を塗らぬ自信が冷たすぎ　岡山県　坂手　年子
新曲をおぼえる友へ声を貸し　堺市　杉前　南宗
青空へ突き刺さってるテレビ塔　兵庫県　岸本　暁城
どん底を笑える修業まだ出来ず　宇部市　神田　豊年
子供の日帰りは親父が手を引かれ　京都市　児玉　桃郎
ゴールデンウイークらしくスト稼ぐ　宇治市　柿本　古竹
よい雲が出たとカメラを取りに去に　大阪市　堤　勝三
苗代青々牛耕はかどらず　山形県　菊地　白葩
藁屋根を見下して料亭新築し　石川県　林　古意知
肩の荷がおりたか父は急にふけ　笠岡市　佐内　隆文
制服で病む子守して駐在所　今治市　池内　好月
仲直りさせておのろけ聞かされる　岡山市　杉田　明子
花見すにアベックばかり見て帰り　静岡県　鈴木　淳
爪跡は矢張り課長恐妻家　新居浜市　加藤　向水
滞納の家テレビジョンに団らんし　尼崎市　井沢　正直
入試から入社へ母のしわがふえ　広島県　御戸　凡平
へちやなのか仲人顔のこと言わず　大阪市　河井　庸佑
人の眼で見た秀作を良いと言い　大阪市　辻　貞子
散る花を追わない男の意地があり　福岡県　三上　春雄
母の日の母いつもより気がつかれ　新潟県　高野むじな
長針と短針のように共稼ぎ　大阪府　沢田　美喜

日曜は一日家で子を叱り　松江市　岡崎　祥月
待つ人は来ず押売りが三度も来　大阪市　北野　水楓
大雨に牡丹は傘の下で咲き　尼崎市　林　澄子
プライドも無く金金と追廻し　鳥取市　岩田天保銭
皆言わしてから係りが違います　岡山県　沼田　三六
夜桜へ見せたい処女の紅をひき　岡山県　秀川　承平
不機嫌さ電話あり〳〵伝へて来　大阪市　桝本みのる
回診へせめて一張羅の浴衣　和歌山県　柏木　天歩
親切な車掌でバスの酔いも出ず　岡山県　池田　文女
五分刈のようなお山を案ぜられ　岡山県　野々口美舟
寝て待てどクイズ果報の沙汰が無し　鳥取県　亀崎　漫歩
女客父は散歩に追いやられ　宇部市　上杉　雪峰
一筋の芸にささげて文化財　宇部市　鎮波　錦花
奥の術でだましたつもり知らぬ居　宇部市　魚富　天作
口止めももうこれまでの証言台　大洲市　尾花　群雀

評　春巣

旭童氏の「下肥の」、「失職をして」、「晴耕雨眠」など百姓を楽しんでいる様子が出ていて、よいと思った。身辺句が一番作り易く、又実感のこもった句が出来るよい例である。阿季良氏は千石荘の療養者であるが、矢張り「療養所」の句が一番よい。牧人氏の「生字引と」の句、何か深刻なものを持っている。文平氏の「揉消して」の句は世の中の哀れを見せられる句であり、「結婚を」は微苦笑の句と云えよう。梢月氏も療養者、「目に青葉」は実感であり、「金廻り良くなり」は実見の句であろう。凡々氏の「辛子振る」、「つまみ食い」の二句何れもこまかい所まで見ていると思う。どんたく氏の「芸無しの」の句「ひたすらに」がよく効いている。「春日遅々なり」も漢語を使ってあるが「金のない日曜」と軽くつけている所うまいものだ。同感させられる。

前にして、郷里の先輩杏園氏を偲び「金城一」と称す芳醇一盞を傾けた。

○

米原にもう旅人は国訛り
旅はよし皐月の風の爽やかさ

一昨年か？古稀である氏として元気旺盛―久遠にその画と、書の墨痕も鮮やかなるに敬服したい。

新樹の木芽峠　杏園

木芽峠は、郷里（金沢）への往復には必らず郷愁の処である。汽車米原を過ぎ裏日本という感じは、大分に以前とは異りしも、右方の聳ゆる連山の起伏を、左手に日本海の晴靄一抹するあたり、そろ〳〵分水嶺を越え風も北国らしくなるのである。殊に晩春の杉津、大桐あたりの新緑は萠えて旅人の情を慰めてくれる、この欣びは私だけではないと思う。

×

青ペン　赤ペン

今は西村夫人となられた前編集長梨里氏が、御夫君とひょっこり不朽洞へ遊びに来られた。

お二人が食事をされると、葭乃先生はペンと原稿紙を持って編集室へ退避される。金泥集の選をされる時はオッカナイ先生になられるが、この場合トテモ粋ないゝお母さんになられる。猫の丑松クンまで気を利かしてか、葭乃先生の膝へ来る。――シンネコをじゃましちゃわるいからナ――と言ったかどうだか。（不）

池上知恵美さんを訪ねて

（女流作家訪問記17）

丸尾潮花

逢うた始めが円通寺ならば、なんで馬橋が時雨よか。鏡野音頭の哀調に誘われて、岡山県苫田郡鏡野町円宗寺に、池上知恵美さんをお訪ねして。母堂きくさんとお二人で出迎えて頂き、きくさんの部屋である離れの一室に通された。床の間の水盤には知恵美さんの手で活けられた、未生流の藤の花が薄紫に咲き誇っている。備前焼の煎茶器で銘茶を進めて下さる知恵美さんのそばで、きくさんが、色々な資料を与えて下さる。きくさんは大阪の川口町にあったウイルミナ高女の出身であり、葭乃先生の方が少しお年を召されていろが同じ川口町にあったプールの英語科出身なので、どちらもミッションスクール出という親しみもあり、葭乃先生からのお言葉添えもあって初対面とも思われない気易い気持でお話が色々と伺えた。少し落ちついてから知恵美さんに質問の矢を放った。

「いいお答が出来そうにも有りません」と微笑を浮べながら話される知恵美さんは、津山美咲高女を卒業後間もなく十五代目の泰二さんに嫁して来られ今は三女のお母様でいられる。

「失礼ですがお幾つになられました」

「兎ですの」と小さな声で笑いながら答えられる知恵美さんは、芳紀正に四十一歳。

「御家族様は」

「父母と夫と私と三女の七人なんですけれど長女の都は短大を出るなり、岡山の医大に勤めています。二女の和子は姉の下宿から岡山県立高等学校に、三女の方は自宅から津山県立高等学校にそれぞれ通学をして居ります」

「お嬢ちゃんばかしで大変ですね御養子をなさるんですね。最も私の家も先祖代々の養子筋でして父で十七代目の養子なんです。どうやら私だけがまぬがれましたが、十九代目は又養子ということになります。何か宿命のように思われます。知恵美さんは町の婦人会の支部長をしていられる様に、有子さんからお聞きしていましたが友の会のお世話とでは大変ですね」

「婦人会と申しましても鏡野全部ではなく、円宗寺だけですし、それに思う程のお世話も出来ませず、行届かない事ばかりで町の方にも、友の会の方にも、申訳ないと思っています」と謙遜される。

「川柳をお始めになってからどれ位いになりましょう」

「どれ位と云われますとお答えに困るのですが、俳句を三年ばかり作っていましたところ、其の後進めて下さる方が有って、かがみの川柳に籍を置かして頂きました。ところが、私にはどうしましても、かがみの川柳が、そうだと申上げるのでは有りませんが、郷土川柳がピンと来ませんので、自然川柳と言うものに馴染めないで投句もしたりしなかったり、句会も田舎の集りですので、夜分十二時頃にもなりませんと終りませんし、母もこうした遅い会合には賛成して呉れませず、自然句会にも出ない時が多く成りまして、ただお付合と言った程度のものでした。そんな訳で自然句も上達しませず、いっそ止そうかと思っていました時に有子さんが川柳婦人友の会への入会をすすめて頂きまして始めて「川柳雑誌」を拝見する機会を得、大阪を始め各地の皆様の川柳に接しまして驚きました。はじめ、これが川柳かとも思った位でした。どうしたらこんないい句が作れるのかと不思議にも思いました。最も指導者も鏡野には居られませんし、毎月十九平さんが選評をしていられる程度ですから、何とかして早く大阪の皆さんのような句に少しずつでも近づきたいと「川柳雑誌」を手にする度に痛切に感じていましたが、幸い鏡野地区は潮花先生が直接通信指導をして頂ける様になりまして、家庭の者も川柳に理解を持って呉れるようになり、友の会の会員の皆様の句もぐん〳〵良くなって参りましたので喜んでいます、ですから私のほんとの柳歴は潮花先生に教えて頂ける様になってからだと云えましょう」と笑いながら言葉を続けられる。

「私などにも大阪の皆様の様な句が作れる様になりましょうか」

「なって頂かねば困るんですよ。都さんからもお手紙で、川柳は母のたった一つのささやかなお趣味ですので、どうか私の母をいい川柳家にしてあげて下さいってね」

「あの子がそんな事を先生にお願いしていたのでしょうか」ふっと言葉を切られる知恵美さんの瞳は都さんに対する感謝に濡れていた

娘の温みだけが足りない置炬燵

娘の戻る知らせへ小豆煮えている

これが母としての知恵美さんの姿でもあろ。

「句はどの様な句がお好きですか」

「総体に淋しい静かな句です。葭乃先生の

月おぼろ君の情に似ておぼろ

など、とても好きな句でしたし、潮花先生の句も真似たい程好きですが、とても私には出来ません」

「大変ぶしつけな事をお聞きしましたが婦人部のために協力して下さって有難う存じました」

「明日はいよ〳〵お別れですね」

明日の帰阪へ心なしか夜来の雨は風を交えてはげしい音をたてている。静かな夜のひと時、知恵美さんが、川雑婦人友の会の理事としての活躍とよき閨秀作家となられることを祈りながら筆を擱く。

次は中島とし代さんを訪ねて

人間横丁 ㊴

親の感慨

東野大八

「失礼ですが、貴方、お子さんはいくたり……」
「はあ、三人です」
「で、男のお子さんは……」
「それが、みんなフリゲート艦ばかり、つまり三人とも女ですワさっぱりあきまへん」
「ふむ、それは、それは……」
と相手も、この辺で子供の話は引込めてしまう。つまり話にならないのである。

四国に居たときのことだが、裏の一家は七人も子供があって、全部女である。

「一体どういう加減ですかね」と私も見るにみかねて、つい思うまゝのことをいってしまった。

「畑が悪いんですよ、うちの奴は酸性土壌ですからな。これがニワトリならうまい話なんですがねえ」と、その御亭主口惜しそうな顔をして然るのちおもむろに苦笑してみせた。彼にすれば〃今度こそ男だ〃と次々期待したことによって、いつのまにやらちょいとした女学校を狭い家の中に作っちまったわけである。

「紺がすりの着物をちゃんときた、はしこい男の子をみると、あんな子供がおれにもあったらなあ、とよく思いますよ」とこんな話の後で述懐した彼の言葉に、私も心から打うなづいたことであった。

私の長女は、いま四年生で一家中でも一番の健啖家だが、この子は、私のどん底の最中に生れた。畳一枚もないさるお寺の位牌堂で姙ったのである。引揚げてきて八カ月もルンペンして風呂銭もない暮しに、遠慮もなく生れ出ようとしていた。加うるにその時の妻は、病身で敗戦直後の食糧難や生活の不如意がそれに重って、黄色くしなびていた。この身体で出産をしたら、と思う不安の蔭に、私は私で戦傷とはいえ隻手の身である。生れる子供が、もしおれのように手が一本切りのオカシナ子が飛出すのではないか、と初めて父となる経験だけに、今思えば可笑しいほど、その時真剣に考え込んだものである。結局そんなことのあれやこれやで、毎日本堂に出ては、正面の阿弥陀様に〃この私をお救い下され〃と、懸命に拝み祈ったものである。そんなころの森閑とした初冬の夜半、庭の墓石の上にみた寒々とかゝる青い半月の光りを、私は今もって忘れない。

二番目の子は、四国の新聞社に就職したころに出来た。親馬鹿かも知れないが、この子はみるからに可愛い女の子だった。生活が一応安定し、家もどうやら畳を敷いたまともな部屋、ということが母胎を豊かにした故かもしれない。

—父ちゃんになった夜、星はみな光り

という句を作った、長女出産の感激からすれば、次女の方はこんな子だけに

—晴の子のぬくみえとける酒の酔

といさゝか、父としての幸福感やユトリが出てきていた。

三番目は、岐阜へ来て家内の生家で生れ大きくなり、目下幼稚園で、元気におしゃまぶりを発揮している。頭のしんに渦巻が二つもあって、三人中一番はっきりしていて、気が強い。時折私の虫の居所が悪く、かっとなって連中に一喝すると、その子供らを代表してこの子が、一番先に抗議する。

「そう怒ると、おトウちゃんと呼んでやらんワイ」

この子が、男の子だったらとよく膝にのせては私は考えこむ。この亭主の心根を、女房もいつか察して、いじらしくも思うのか。

「本当にこの子が息子だったら、どんなにせいがあることかねえ」

としみじみと言う。

「いゝさ、男の子だって女だって、ぐれた息子に殺されて洋服ダンスにしまいこまれた親が四国にあったからね」

なんて、こちらもそんな気休めの一つもそうなるといってみたくなる。畑のせいにしてタネのことにふれないのも、私の身体ではないが、まさに片手落と感ずるまでに今でも成長している私である。男でも女でも、子のある夫婦は、苦しくてもどこか、豊かに、生活を温くしてくれる何かをもっている。しかし、縁あって私のような不具な男の女房となり、女ばかりを産まされている女房という人もよくよく運の悪い人だ。

「いついつは子供の参観日ですから、一度出てやってはぐれませんか」

と、これまで幾度彼女からいわれるか判らないが、いつもいゝ加減にゴマかしておく。というのはもしも人並な顔で出かけたら、手のない親父と子供の級友にバレ、どんな肩身のせまい想いをするか。行きたくても私はいけないのである。

いずれにせよ、夜中ひそかに眼ざめると、ついこの間まで、女房と二人でママごとのような世帯を持ったと思ったら、二人の真ん中に、三つ小さい顔が並び、それぞれの生存権と人権を主張して、こざかしい人生を明日に持とうとしている。その姿をみると、ふいと奇妙な感慨にとらわれる。

（彼らは一体どこからワイてきたのだ）

だが、考えてみると、私や妻が滅んだのちも、この子らが母となり、祖母となるうち、一体幾人の人間が、私の血をひいてこの世に生きていることだろうか。それを思うと、未来の中の自分が、ひどく有意義で立派な人間のように思われてくるからこれまた妙な話である。よし女の子にせよ、子をもつ親の感慨はこのように、たっぷりと豊じゅんなものなのだと独り納得したりする。しかし、その心の中で、次に頭をもたげるのは、果してそれまで、われはよき親たりうるか、という反問である。そうすると、妻をふくめた子供ら三人の貌が、私に一切を任ねて安らかければ、それだけ私はリツ然となったりする。あえない風のように、私の傷口はそんなとき、虚しい疼痛を私の心の底にまで吹きつけてくるのである。五体満足な人間が、このときほど、うらやましいと思うときはない。

同舟近詠

国会はわっしょい〳〵のぼせきり　松山市　前田伍健

宝くじ当り近所がうるさすぎ

拝み屋のどこからあんな声が出る

未亡人サロン同情すきが来る

借電話うそ面白くきかれてる　大阪市　麻生葭乃

多鯰（たね）が池見れば砂丘のなお白く　鳥取にて

指ぬける砂丘の砂もさら〳〵と

三朝から追手も来ずに無事帰り　長野県　高峰柳児

間借して憚る煙り細く立て

すぐ惚れる妓女将の手を焼かせ

裏門を役得それとなく教え　和歌山市　秋月宏方

ぼんぼりは花と運命共にする

乳バンド色気の多い生れつき

幕間はたべねば損をするような

ヘビ或日八頭身を見て笑い

冬物の重たさ知った土用干

だんご鼻映すに小さい姫鏡　大阪市　石田沐天

ロマンスグレーすこし酢っぱい恋をして

夫婦善哉ズバリと言える夫婦なり　今治市　長野文庫

去る者は疎し芳名簿を削り

人よりも判を信用する役所

呉れろとは言わぬが係物欲し気

倍になる話うま〳〵ひっかかり

少しづつ貯めたお金は逃げ出さず

そんな筈ないが巡査にどきっとし　大洲市　米沢暁明

宿題のここらは親の手がはいり

医者今宵算盤はじく用が出来

一生を踏石になる石想う

新緑へ看護婦の白浮いて佇ち

川柳第二教室

作句指導

戸田古方

研究題「星」

夏、夕涼み、涼み台、星、星の伝説、星祭り、どう見ても情緒的です。

蝙蝠の中で一番星見つけ　微酔

まだ夕焼の余燼が西の空に残っています。

盲目でもきれいな星の涼み台　三六

同じ作者が盲目が「星へ耳をむけ」たとか「星をみのがさず」とかいっていられますが、「耳をむけ」はあまり理に走りすぎ、「みのがさず」は感覚だとしても作為が強すぎます。この句の程度で止めた方が余情もあるといえるでしょう。

いろ〳〵の伝説つけて光る星　豊平

伝説をつけたのはみんな人間の仕業。いろ〳〵の伝説をつけずにいられなくしたのは星そのものでしょう。

童心にかえって星が美しい　牧人

ほんとに美しいですね。用語の簡素が「美しい」をます〳〵美しくしています。

天の川水掬む役の七ツ星　凡九郎

こうした伝説の内容にふれながら詩情を失わせないのも星なればこそ。

核融合よりをとぎ話の星がすき　桐生

理が立ちかけていますが、この「核融合」という堅い文字はかえって星の夢を引きたゝせます。

何光年の距離が星を小そう見せ　凡九郎

光の速度で一年間走りづめに走って、やっと一光年、メートルやキロメートルでは追つきません。大分思索的になってきて

よく見れ星ばの光のさまざまや　雄声

と発見することにもなります。だが

星一つ雲の切れ間にあると告げ　堯二

と現実に引きもどされることの早いこと。この句の下五の「あると告げ」は「あると知れ」ぐらいの方がよくはないですか。もっとも「知れ」でもまだ落ちつきがよくないですが。

明日は天気か星がまだ出ない　登

まだ薄雲がかゝっているのでしょう。遠足やピクニック、それにてる〳〵坊主を結びつけた句が沢山ありました。やがて晴れることを期待して夜空をじっとみつめているところはよく出ています。

発見といえば別れ途意外に明い星に逢い　かつみ

時と処がそろえばこんな句も生れます。馬鹿に明るい星やなと思いながら、その名の一つも知らないのは日常あり勝ちのこと。

連れた子にヤット星の名教えられ　亀庵

この頃の社会科や理科はすゝんでいます。だがたゞ名前を羅列してみたところで、それが何になりましょう。やっぱり星は夢の世界です。

母のない子母さん星がある　義夫

お空母のない子は七夕をまだ信

金泥集

課題「影」　麻生葭乃選

こんなだといいのに影の八頭身　千永
なき声で犬だとわかる子の影絵　百合子
影見せてかくれんぼうは隠れた気　幸子
影をだに踏まぬ先生スト教え　周甫
影ひなたなく働いてなお赤字　美舟
面影がうすれ再婚すると決め　冨士子
先生の影が大きい鬼ごっこ　湖月
影を見つめて待っていた小半時　初穂
影絵して女囚孤独をなぐさめる　明子
薄情な人の影さえ腹が立ち　ひさみ
ブランコの影も面白そうに揺れ　花代子
苦労した母よ影まで小さくなり　きさ子
留守居の夜蜘蛛のかおまで大きくて　白香
水に浮く影も燃えてる鵜飼の火　千代美
月影が心の傷をなお深め　洋子
鳥影にひょっとしたらと心待ち　阿茶
子が二人出来ても面影去らぬ人　操子
約束へ人影絶えた駅で待ち　奈良子
師の影を踏まず通ったのはむかし　美喜
面影をしのび命日語り合い　香月
木の影をたより麦刈汗をふき　たつよ
恋つづる夜のスタンドの影がのび　知恵美
美しい影はかえるにくづされて　文子（岸和田 兵庫県）
影踏みではしやぐ子等の夕涼み　文子
影だけが八頭身のひろさがり　梅林
プラットの面影長糸を引き　有子
行過ぎりゃ又寄そうた影二つ　都詩子
息詰るギャング映画の影ぼうし　一栄
夕焼へ水車の影がゆれている　好子
夜警ふと自分の影に立どまり　花鶴美
ふと母の面影が浮く御命日　年子
まけまいと影を障子へ舞稽古　とみゑ
汽笛一声煙の影は麦へ落ち　葭乃

じ　英断

母さんは星になったと子は
信じ　南天

母子星とかいうと少女小説にでもなりそうですが、そこに星があるのではないのでしょうか。この三句のうちでは一番目の義夫さんの句がよさそうです。表現の客観性が主観の自由をさまたげていませんから。しかし、「信じ」という使い方も適切でないというのでありません。かえってそうした稚拙さがまた幼い母のない子のうごきを見せてもくれます。星は子供のものでもあり、又大人のものでもあります。大人は大人で

星の仲間トラブルあるのか
近寄らず　静観堂

星一つ下絃の月に添うてゆき　初甫

前は男性の、あとのは女性の句です。同じ擬人ながらねらいが大分ちがいます。よく見ておいて下さい。

星空へ山は威圧を感じさせ　英断

と星は時はバックと退いてもくれます。そして人間の中には

星のない夜は話題もとぎれがち　雪山

とひかえめに殊勝なのもいますが、

老らくの恋は星など持ち出さず　英断

だがそうとばかりいえるでしょうか、恋も老らくともなれば案外センチメンタルに星をよろこぶ童心にかえるかもしれません。

二人の影並んだまゝの星月夜　初甫

たゞそれだけをぶっつけて、何もいっていませんが、

星なんぞアダムとイヴはうわの空　直路

星さまがだん〳〵遠く見えるキス　文平

とちがった味があります。この「アダムとイヴ」も「遠く見えるキス」も肉の匂いが露骨にただよいかけています。それはそれなりに川柳でなければあつかわれないものをたゞよわせていますが、夢であり、詩である星ともなれば「並んだまゝ」に美しいものをより多く感じるのです。

まあ二人してみるから星も美しい　英断

ぐらいのとこですか。初甫さんの句につぐものでしょう。あるいは本人にしてみると案外

星空か月夜か二人おぼえてず　どんたく

こんなところかもしれません。

かん高い声で教える流れ星　初甫

星も流れ星となると不気味さをたゞよわせます。

ゆうれいが出るの控えたり星月夜　天作

それ程にも明るい星月夜、やっぱりからっと晴れていてはゆうれいも出にくかろう。しかし人の世は明るくともくらくともすみにくく、

腕組んだ二人星の目感じつゝ　柳叟

腕組んだですから男同志でしょう。何の相談か一寸きゝたくもなります。

貧しさも富める者にも星は星　美善

月でもよさそうですが、かすかな星にこそ貧しいものゝ救いがあるようにも思われるのです。弱い人間、はかない人生、そして

十字星出れば父ちゃん酔って居り　直路

十字星の話が出ればでしょう。「十字星出れば」は「十字星の話」とでもしてみたいところです。次の句がなければ現地か内地か迷いかけました。

今生きてサザンクロスの見える島　直路

へだたりを越えて今宵は逢える星　一鶴

初心でいられるそうですが、私はこの星を一応運勢とみたのです。よい星の下に生れたよろこびなんでしょう。

何げなく見上げる星に娘の瞳　錦花

「逢えろ星」が運勢と自然の星とのモンタジュー、そして乙女の瞳がこゝでまた自然の星とモンタジューしています。

星の数かぞえた背中の子がねむり　美舟

星はやっぱり子供の世界へかへって来ました。

研究題「仏」（ホトケ）
（〆切）七月十五日
（発表）九月号予定
（投句先）豊中市本町三丁目二〇一　戸田古方

わが兄

番傘の重鎮島語氏川雑の巨星好郎氏をそれぞれ令弟に語つて貰つた。美しい兄弟愛が川柳によつて結ばれている好読物を得た事を感謝する（編者島）

川村好郎を語る

松江梅里

兄好郎は六人兄妹の総領。私は二男に生れあとは女ばかりの姉妹である。父は極端な子供嫌いであった。尤も作ることは好きであったが育てることが嫌いであったらしい。兄一人を残してあとの五人内一人は夭折して、それ〳〵里子にやられ兄一人一家の寵愛を一身に聚め四人分の母乳は一人で呑んでいた。小学校へ這入っても母の乳房に縋っていた。祖父母や女中に寄ってたかって可愛〳〵のぼんぼん育ち、雪が降れば学校を休ませ、冷たかろ寒かろで膏ぶくれていて、冬中風邪ばかりひいていた。三伏の夏ともなれば絶対日中は外出させない、脳が悪るなるとの理由で。

また一方私は全くの藁の上から松江の家に養子にやられ、これまた一人子が可愛〳〵で兄と同じ様な文字通りのお乳母日傘で大きくなった。母乳がなく、ミルクで大きくなったので、小学校へ這入ってもチマメを離さなかった。夜はお茶を飲ましてくれなかった。寝小便をするからである。かくて所謂えゝとこの子として育ち同じ様な行程を辿って大阪と堺でお互いに成人した。

兄は叔父の貿易商に勤め、私は養父の実業を継いだ。私の二十才の時生母が亡くなった。その時に初めて兄であることをはっきり知ったのである。次いで適令検査に養子であることも解った。それほど大事に育てられたと云う反面、鈍感であったとも云える。晴れて兄弟の名乗を上げたのは養父母の亡くなった私の四十才の時だった。その後兄とは頻繁に往来し、日を追うて親密の度が加わって来た。性格も趣味も嗜好も全く同じであることも嬉しい。

毎年元旦にはモーニング姿の兄が態々弟の私の家へ年賀に来る、これには私も恐縮しているのだが、これには理由がある。戦争中私が徴用逃れのため島野工業KKに入社した。その後兄の貿易商も統制で駄目になり、うろ〳〵していては徴用が来ると云うので、私を頼って来た。島野工業へ口添えをしたが、それが兄の今日その重職に就く原因でもあった。それを恩に着ていつも元旦には必ず挨拶に来てくれる。一寸出来んことで兄に教えられることが多い。兎に角兄は信念の人であり、努力の人である。処世訓として「何事も仰せのまゝ」をモットーとしている。面白いことに兄は自転車によう乗らんのである。これもお乳母日傘の罪で、危い〳〵で育てられた結果でもある。自転車屋に奉公して自転車によう乗らんとはガシンタレやなあと揶揄ってやった。

も一つはリンゴの皮をようむかんことも面白い。洋式の宴会では絶対リンゴに手をつけない、大ていみかんかバナナを用いることにしている。

兄のヤマコを張らないところが好きだ。たとえば兄の名刺を見ても、肩書と云うものがない。唯島野工業KK川村好郎とあるのみで誰しも偉くなると何々課長だとか、部長だとか、取締役だとかまだ表だけでは足らず、裏にまで刷ってある名刺を呉れる人さえあるのに。永らく東京出張所長として赴任中、時折帰阪することがあっても決して東京弁を使わない。それに引きかえ従兄のHは初めて団体旅行で、四泊五日の東京見物をして帰えったとき、キザな東京弁を使って鼻持ちならなかった。従兄に箱根へ行かれましたかと聞けば行かなかったという。これがほんとの箱根知らずの江戸っ児だと思った。

川柳を初めたのは昭和十三年頃、当時路郎先生と水府先生が夕刊大阪新聞に毎夕交互に出題され、今の毎日柳壇のように盛んだった。その頃期せずして兄も私も応募していたのである。相前後して入選して兄もやっていることがわかり、それからはよきライバルとなり、病みつきになってしまった。その後兄は松坂倶楽部の会員となり、親しく路郎先生の指導を受け、忽ち私を引離してしまったのである。兄の慈愛の手は間もなく私を不朽洞会員に推薦してくれた。そして鞭撻の手はゆるめなかった。いつも私のよき指導者でもあった。機会あるごとに私を引上げてくれた。兄を好敵手として努力精進していろがやはり及ばない。偶々大蔓川柳で図らずも首位を争い、結局私に花を持たせてくれたが、それを心から喜んでくれていることが兄の真情である。

川柳することに依って我々兄弟が真に解け合い助け合うことが出来る幸をいつも感謝している。今後も最もよきライバルとして、兄として、余世を愉快に送りたいと思う。

兄はまた家庭にあってはよきパパであり、愛妻家である。

大阪しか知らずに妻は老けてゆき　（好郎）

などは思いやりが溢れている実感の句である。外にも妻を主にした数多くの句を持っている。

春雨に女房と濡れるあほらしさ　（好郎）

これは嫂には見せていないだろう。若し見られてもこれは言葉の裏だよと詫びていることだろう。もっと変っていることはお互の女房同志がもう何十年間一度も顔を会わしていないことも奇蹟である。お互いの家に冠婚葬祭があっても兄の方へは私が出席する。私

の方へは兄が列席する習慣になっているので顔を会わす機会がなかった。

六月二十四日の母の三十年忌を期して、お互いの女房の大顔合せをしようと話が決まり、近くその日の来るのを楽しみにしている。

兄弟がチョボ〳〵てあり恙なし

（梅里）

三一、五、一〇 記

完

生島鳥語を語る

生島波濤

子供の頃から兄弟喧嘩をしたと云う記憶がない、鳥語と波濤である。それと云うのが男兄弟は二人、妹が一人あるきりで、今と違って産児制限など思いもよらぬ時代としては、兄弟の数が少なかったという事も原因しては居るが、兄は商業学校当時から、幾分病弱であった為、徴兵検査は丙種であった。

僕が二度目の召集で、ビルマへ出発する直前の和歌山の兵営での、最初にして最後の面会日、昭和十八年七月の太陽の真下の営庭である。兄は、其頃既に不自由であった銘酒菊正宗を、水筒の蓋に酌いでくれた。言わずと知れた別盃である。兄は一口飲んだだけで、三合入水筒を綺麗に飲み干す僕を、じっと見守っていてくれた。文字通り後顧の憂いなし、何も話さなくとも、はっきり胸から胸に通うものがある。

鳥語は、頼み甲斐ある兄であり、そうして変な言葉であるが、親友である。年齢は四つ違いで、僕の趣味は、いつも兄のあとを追いかけていたようなものである。

歌舞伎、映画、読書、そして川柳、兄は謡曲に四、五年の間、熱心に凝ったものだが、川柳を始めると同時にぷっつりと止めた。謡曲だけは僕の性に合わぬとみえ、兄の真似をしなかった、たった一つの例外である。

さて、此処に顔を出して来たのが川柳である。兄は昭和六年の番傘新春句会に、本名をもじった与志克の号で始めて出席をした。僕も亦、兄の真似をして、其年の四月句会に出席したのである。

その日から二十五年、鳥語の川柳は番傘一本槍で、弛まず続けられて来たのである。父譲りの世話好きと、社交性を、業界にも、又柳界にも遺憾なく発揮した。京都の斉藤松窓氏が、もっとも番傘調の句を作る鳥語、と川柳街誌上に評していたのは、昭和八年の事と覚えている。弟として、兄の川柳を兎や角言う事は控えたい。唯、戦争中に発表した。

河内大和霞は二千六百年
万葉の頃より強き民の歌

戦争を忘れてならぬ人通り

総力を挙げて、日本が戦争に突入した時、川柳家がペンを武器として、士風昂揚の一句、祖国愛の一句を、次々と詠って行った事は立派である。戦争には敗れたけれどもこれ等の句が、敗戦によって価値が減ずるものとは思われない。右の三句は、鳥語川柳の代表句の内に入るものである、と信じている。

兄は祖父の代からの生粋の大阪商人である。綿、蒲団の販売を業とし、若い時は製綿工場も経営したが、戦災を受けて工場の方はそのままとなっている。

昭和二十七年春から、兄は病床に就き、それからの四年間、寝たっきりの日常である。駈けつけた僕に、兄は主治医から、最低三年間は床に就かねばならない、と言い渡された事を、静かな口調で話してくれた。口先だけの慰めなど、何にもならないと判っているだけに、答えるに言葉が無かったのである。

しかし兄は、先ず三年間臥ていなければならない、と言う諦めと、三年先の全快に希望をつないで、焦慮の色を見せなかった。最初の一年程は、病勢も一進一退して苦痛と苦悩が断続したようだが、其間でも家業の采配を振わねばならない間屋の番頭が来れば枕元で商談をする、蒲団の生地を並べさせる、綿の色を、弾力を検してみる、そして、川柳を考え、川柳を詠んでゆくのである。

兄は、川柳の上にも一つの転機と見たか、二十八年秋に処女句集「鳥語」を刊行した。幸いにして好評であった。臥て居れば気が散らない故か、毎月の番傘誌上の川柳相談所の執筆も快調である。

なつかしのメロデイ妻も四十過ぎ

寝ていてものし紙の要る事つづく

癒して、これから、坐る、起きる、歩く、の練習をせねばならない段階にまで回復して来たのである。長い病床生活の苦悩と、単調を、川柳に依って救われた鳥語の作品に、病苦を訴えた川柳は無い、病床生活を淡々と詠んだ句を見かける程度である。兄の川柳の一特色であると信じている。

最近電話が開通したので、臥ながらの商売も便利になり、川柳家との接触も益々頻繁である。今日も、「35ノ五〇九四」を廻せば、電話口に直ぐ鳥語が出る、電話器は枕元にあるのだから、「ああ、波濤はんでっか、今日は」から始まって、大抵の場合三十分間位は話が尽きない。弟は只合槌をうつか、返事するだけであるが。

昨年秋、兄の一人息子の進君が、孝子として市から表彰された、がその蔭に、病床の世話と、商売と、そして明朗な家風を築き上げた義姉の深い愛情と、内助の功のある事を忘れてはならない。

目を窓外に放せば、白雲は既に初夏の光りを受けて、西の方へ静かに流れてゆく、今日も、鳥語は黙々として真剣に起きる練習をしている事であろう。

（三一、五、五）

おだてつつ使い我子は有難し
花は見ずとも心満つごもく酢
商人のかなしさ直ぐにメモにする

病状も、昨年末頃から殆んど快

雅号はがき

下関市 川雑下関支部 石川侃流洞氏

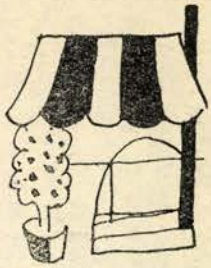
雅号の読み方やその由来を尋ねて全国の川雑系作家へ葉書訪問をしてみました

不朽洞編集局 不二田 一三夫

（1）

本名は石川侃（いしかわすなお）雅号を侃流洞（がんりゅうどう）とオッシャル。ちょっとコワイみたい。

厳父が長男息子の将来に栄光あれかしと、さるお偉ら方が名付親になられたとか——本名を大切にする意味から雅号も「侃」を用い、流の流を加え支部長を継がれた時、易学から高橋かうたる氏が名実共にと更に「洞」を加えられたそうな。



一路集

麦酒

宮田不二選

珍客へ派手にビールの栓を抜き　与呂志
二次会は麦酒の泡へ五色の灯　立児
旅愁ふとビールの泡へ妻の顔　有子
女連やっぱりビール飲んで居り　狂二
一日の疲れふっとぶこのビール　庸佑
社用族ビールビールの日が続き　義美
酔ざめの水のビールにする酒豪　葉光
麦酒の泡から恋がうまれて来　祥月
これなればいけるだらうと麦酒注ぎ　堯二
おビールへきうりをきざむ台所　東岸子
酎飲んだ舌ですビール物足らず　雪峰
誕生日麦酒を妻にすけられる　堅持
栓抜いたビール歓喜の泡を吹き　箔川
時勢なり女も麦酒飲むと云う　晃康
回復期麦酒へやっとたどりつき　三六
栄転の麦酒の酔も心地良く　恒雄
まっすぐに帰る夫を待つビール　雄声
あつさりとビールを受けるテンエージャー　与呂志
ビールより三味にはやっぱり酒が合い　文平
久潤の友へビールの栓を抜き　十九平
明るい家庭妻もビールのコップ挙げ　静観堂
ビール呑む女の声のはづみよう　有子
昼の労ビールの泡でいたわられ　進之助
待ち合せビールの泡が消えて居り　亀庵
商談のもつれをビールまとめあげ　豊年
酎もいいじゃないかアハハハハビール腹　実男
おビールの客へ女給は遠慮せず　代仕男
冷蔵庫褒めてビールを持込まれ　英断
ビール党もチャンと見込んだ名幹事　光郎
口止めのビール代が高くつき　狂風
麦酒の栓ぬいて先ず御無沙汰をわび　桐生
女先ずビールで稽古すると言う　南天
ビールつぐ手つき意味ある女の眼　古意知
女子大へ来てからビール好きになり　雪山
内祝妻も素直にビール受け　水堂
おつまみとビールと妓それでよし　トン坊
夏の酒冬のビールと変り種　万古
我が恋はビールの泡にさも似とり　七面山
制服を脱げばビールの友が出来　三林坊
ビールより酒よりあの娘と飲むジュース　高志
話好きビールの泡は消えたまゝ　英断
冷ビールこの二階から海が見え　トン坊
スランプのビールの泡を吹いて見る　三林坊
重役の冬もビールの肥りよう　万古人
ネクタイをゆるめて二杯目のビール　牧人
娘もう麦酒が苦いとは言わず　藤波
花吹雪ビールの泡を吹きわける　恵二朗
ジョッキーの形が好きとビール党　高志
苦いもんネと娘もビール飲み　文平
登りつめた峠の茶屋で飲むビール　七面山
午下りビールが井戸でぶら下り　一也
麦酒なら酒ではないと言う禁酒　日本村
酔はせてこそ上眼づかいにビールつぐ　高志
(佳)姜宅の花畑ビール瓶を植え　夜潮
(佳)生ビール市迄出て来た訳があり　むじな
(佳)ビールなら少々位とはあわれ　恵二朗
(佳)生ビール肩の上着を持ち直し　葉光
(佳)食堂車ビール小波立てゝ揺れ　良坊
(佳)問いもせずビールにされる程知られ　木魚
(佳)冷えている麦酒たしかめ湯に浴り　葉光
(佳)エチケット麦酒は泡の消えぬまに　日本村
(佳)つき出しが少しもつて居るビール　ひか平
(佳)ビールなら大丈夫だよと誘いの手　高志
(五)世を拗ねてビールの泡にある孤独　三林坊
(五)ネクタイに青春があり生ビール　葉光
(五)醤油の小買に母のビール瓶　素飄
(五)おしぼりのつめたさもよしビヤホール　ト占
(五)麦酒の栓抜くさえ下戸と見破られ　圭水
(人)家族連れビールの父を少し待ち　三林坊
(地)何の為めする乾盃かビール干す　柳叟
(天)青すだれ麦酒へ宵の風があり　知恵美
(軸)優勝の嬉しさビール酌ぎこぼし

途中下車

国弘半休選

途中下車予定に組んで買う切符　進之助
プランには無い出張の途中下車　風柳
潮風に吹かれただけの途中下車　三林坊
途中下車しようか此所も花ざかり　古竹
先輩へ敬意を払う途中下車　蝸牛
電報に追いかけられて途中下車　藤波
古傷にふれて見る気の途中下車　箔川
この辺で聞いて見る気の途中下車　知恵美
記者うまく避けたつもりの途中下車　圭水
寝ざぼけて降りたを途中下車はする　一荷
とも角も一杯やろうと途中下車　七面山
プランとは別に酔うた途中下車　三思楼
手荷物が厄介になる途中下車　素飄
車口ふと会いたくなった途中下車　たつよ
善行が投書で知れた途中下車　英断
喧嘩する気ではなかった途中下車　季贅
人生を途中下車して療養所　満秋
かつぎ屋の定期駆使する途中下車　白猫児
子を連れたばかりに途中下車がばれ　隆夫
帰途下りて解決せよと言う指令　高志
途中下車こゝで浮気をするつもり　南天
途中下車花の名所と書いてあり　雄声
途中下車もあった人生振り返えり　恵二朗
女連れまた気の変る途中下車　堯二
駈落ちが追手まく気の途中下車　晃
失意の身死所を求めて途中下車　雪峰
途中下車宣伝ほどの花でなし　微酔
隣から荷物たのまれ途中下車　有子
途中下車するにも女コンパクト　光郎
途中下車する気の金は別に待ち　牧人
途中下車スタンプ逆さに押して来る　辰始
ゴシップにされる途中下車撮される　三思楼
途中下車をする気一日早く立ち　豊年
ポスターに誘われ途中下車をする　十九平
混雑を見越して一家途中下車　一休
別れたくないから途中下車と決め　雪山
途中下車こゝも大事な地盤です　万古
途中下車したし人生坂になり　五茶
かつぎ屋の六感途中下車をする　恒雄
途中下車事前運動のにほいする　与根一
朝刊の大穴途中下車をさせ　実男
途中下車別なプランの膳が待ち　良坊
(十秀)途中下車サッサッサッと廻って来　三六
(十秀)フイルムの余りが途中の下車となり　春雄
(十秀)駈足で名所を巡る途中下車　東岸子
(十秀)友達へ素通り出来ぬ途中下車　日本村
(十秀)途中下車次の時刻を確める　素飄
(十秀)出迎えのない気安さの途中下車　葉光
(十秀)恋人を送って行った途中下車　ト占
(十秀)本線を二時間待った途中下車　雄々
(十秀)用件に土産が邪魔な途中下車　雄声
(十秀)ちょいちょいと途中下車して平社員　静観堂
(五秀)集金先が此の駅にある途中下車　光郎
(五秀)警察の手へ渡される途中下車　トン坊
(五秀)魂胆を見抜いて女途中下車　亀庵
(五秀)自転車が途中下車するいいところ　不二
(五秀)急患に特急途中下車をさせ　葉光
(人)乗って来た汽車を見送る途中下車　庸佑
(地)電報があわてさせてる途中下車　古意知
(天)かつぎ屋が途中下車して広うなり　夜潮

いのちある句を創れ

花地柳橋

投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月二〇日▼投稿先 本社宛

本社五月句會（大阪市）

五月七日　於　光明寺

風薫る、爽やかな五月、ゴールデン・ウイークの連休もどきに、きょうは柳話が二つならぶことになった。北川春巣氏は、九州学会から取材された専門の医学から、心配とホルモンの関係からノイローゼ、ロマンス・グレイと流行語にまで飛躍して、梅里、ひか平、ひさみ、伝一、潮花、竹荘諸氏の句へ聴診器をあて、近来好調の柳話は堂々の貫禄を見せられた。

路郎師の柳話「とけ込む」ということ即ち川柳に精魂を傾けることの必要さを説かれ、いつもながらの「舌の名人芸」に満場は酔う。席、兼題の披講もスピーディにはこび、五月の不朽洞賞優勝カップは木村水堂氏の秀句に輝く。この溢れる活気、漲る句会も九時閉会。

（摩）

出席者＝路郎・進之助・牧人・悟郎・静馬・飄太・高志・鳥荘・栄断・立児・秋香・狂二・茶仏・雅堂・繁雄・古竹・天真・秀夫・言也・村雲・花香・清潮・利武・凡茶・山茶花・庸佑・竹男・水茶・晃・須賀太・花車・峰春・昌子・博遊・ひさみのろ・九州男・いわを・恒明・摩天郎・省三・生々庵・三司・好郎・春巣・いさむ・古方・水客・水堂・紫香・凡九郎・十悟・文秋・雄声・一ン十・淡舟・多久志・一三夫・愛論・白柳子・潮花・与呂志・梅志・白水・小松園・葭乃・

兼題「警官」　麻生路郎選

警官が日誌を終りうどん来る　鳥荘
刑事とは見えぬ小唄のふしまわし　須賀太
退屈らしく巡査は子と遊び　進之助
警官と聞いても一度いきりたち　水客
坐り込む気は警官もよくわかり　文秋
同郷の妻と警官悪くなし　鳥荘
警官と迷い子が残る催し場　愛論
警官も今日は臍まで出して呑み　茶仏
警官と云う名の誇りがこせっかせ　与呂志
警官の妻でしっかり者になり　梅志
警官も拍手をしたいプラカード　三司
片意地なのが警官を怒らせる　賀峰
警官に荷物たのんで行くトレイ　静馬
警官の二字へ心にもないお世辞　六竜子
殉職をして警官の名が知られ　文秋
警官の夫婦喧嘩も茶腕投げ　狂二
警官へ儲かりまっかと云うてしまい　多久志
一介の巡査で山の中で老い　言也
警官の手帖の隅に善行者　凡茶
連休どころか警官声もかれ　好郎
警官と歩けば人に振り向かれ　一乃字
警官の皆んな同んなじ顔で佇ち　いわを
警官の声でうっかり子を叱り　水堂
もう帰るころに署長の黒田節　路郎

兼題「アルサロ」　清水白柳子選

庶務の娘が居ってアルサロ高うつき　好郎
アルサロのマダムも二号のアルバイト　一三夫
アルサロにやっぱりひもとやらが居り　立児
アルサロぐらいはと倅さりげなし　古方
アルサロへ唄を教えるよう通い　春巣
アルサロの方が出席率がよい　淡舟
ストリップ出てアルサロでもはつてい　春巣
アルサロへ容姿の自信ぶり庶務　村雲
アルサロで拾うた恋と共稼　知恵美
アルサロへ金の無い日は電話し　水茶
学歴は不問アルサロ求人欄　一乃字
アルサロを出て腰かけで飲み直し　一三夫
アルサロに居たのはつまり今の妻　摩天郎
会社用アルサロ用とあるルージュ　蜃気楼
アルサロが本業になりやめられず　雄声
アルサロの結構高い計算書　凡九郎
禿げたのもアルサロおばさん年なんは　一三夫
アルサロでこれ真面目な話だっせ　いわを
アルサロで苦学の意志がくずれかけ　山茶花
アルサロで男はみんなけだものよ　柳童子
アルサロを親の前ではくさしとき　梅志
終業のベルでアルサロらしくなり　生々庵
見学と云うアルサロの連れにされ　凡茶
忘却の果てをアルサロのサングラス　六竜子
アルサロの女無口な方へ坐し　愛論
アルサロで処女の大胆さがわかり　梅志
アルサロに通い造花で春は済み　白水

兼題「方針」　後藤梅志選

現金を見て方針がまた変り　賀峰
結局は子の方針へ折れてやり　昌子
債権者側で方針立てゝ呉れ　省三
方針が先づ就職でけつまづき　文秋
末端で社の方針が喰い違い　水茶
方針が変り顧問が憾になり　雄声
方針は無策の策で行くと決め　凡九郎
損しても方針まげぬ頑固ぶり　静馬
方針の無理を数字が示し出し　立児
方針は安い女工をこき使い　茶仏
方針は試験通ってからのこと　摩天郎
方針を知って一泡ふかせる気　雄声
方針なんておきすかいなとよく儲け　古竹
方針を変え上役にさからわず　水堂
方針を儲け話へ一時変え　水茶
方針が立たないまゝにのゝ明かし　雄声
方針が違うとかるくいなされる　山茶花
方針がまたもくづれた相場棚　淡舟
産制の方針も立てゝ共かせぎ　昌子
方針は方針臨機な処置も取り　凡九郎
達人の眼に方針のたよりなく　古方
いつまでもちゃぶいている無方針　静馬
先代の方針継いで養子無事　多久志
方針をチョッピリのべて訓辞すみ　紫香
方針の事で課長と対立し　淡舟
耳よりな話方針ぐらつかせ　恒明
一家族と云う方針へストもなく　有子
方針を変えた老舗の模様替え　狂二
方針が決らぬまゝに飯になり　小松園
あの時の方針が今実を結び　九州男
方針を相談に来る焼け出され　言也
方針も顔へはもろい物と知り　山茶花
方針にふれる話で骨が折れ　梅志
わたしの方針恐いことを云い　梅志

席題「ポーズ」　菊沢小松園選

ポーズどう変えて撮ってもはえない顔　言也
美しい恋のポーズへ向くカメラ　潮花
その次に何かをねだるポーズなり　多久志
花束を受けるポーズも羽田なり　三司
抱きつくのポーズスターも骨が折れ　茶仏
ポーズした花嫁の裾なおす役　一ン十
素人におしいポーズで写される　白水
粋筋は粋筋らしいポーズ見せ　高志

ストリップまだこれでもかと云うポーズ　多久志
悪びれぬポーズが罪をにくませる　凡九郎
すれ違い一寸ポーズの入る若さ　山茶花
良いポーズしてた写真が目をつむり　静馬
せり上るポーズへカメラマン待期　愛論
栄転の祝詞のポーズ写される　雄声
感付いてから淑やかなポーズとり　牧人
蚊が喰っていても叩けぬモデル台　須賀太
無雑作に男は写すいゝポーズ　凡茶
裸婦を撮るポーズの位置で値が変り　一三夫
背の子のポーズも直しシャッター切り　清潮
意識して崩すポーズのなまめかし　白柳子
はづかしいポーズが妻にまだ残り　山茶花
註文をつけたポーズがぼけており　静馬
ポーズもう貴方まかせの型になり　潮花
素人の写真にポーズくたぶれる　鳥荘
濃艶なポーズ二号と云う強み　多久志
ポーズなぞ崩れてしまう頃に撮れ　高志
ジワ／＼とポーズの腕がさがって来　天真
大胆なポーズでやっと喰べてゆき　小松園

席題「年頃」　丸尾潮花選

年頃は父のレザーをそっと借り　立児
かんじんのとこで年頃逃げてゆき　恒明
年頃は母の意見が気にさわり　賀峰
年頃を憶病すぎて嫁き遅れ　文秋
年頃のニキビギャクタイされている　愛論
年頃の化粧も母の眼を怖れ　晃
年頃の希望と逆に肥えて来る　文秋
年頃は親の時代をあざ笑い　牧人
年頃の共学親の眼にあまり　茶仏
親の恋を年頃の娘きゝたがり　秀夫
年頃の娘へ話題変えてやり　多久志
年頃がおかしな新語覚えて来　十悟
年頃へたゞはら／＼と母の愛　立児
年頃に男ぎらいが気にかゝり　一三夫
年頃へ父頼りなく頼りなく　紫香
年頃を抱えた親の身だしなみ　生々庵
年頃の娘よく喰いよく喋り　利武
年頃の日記伏せ字が多くなり　愛論
年頃が地味な女に目が止まり　梅志
年頃へ只寛容な親であり　多久志
孝行のひとつ年頃早よ帰り　水客
年頃を閉いて染物頼まれる　一ン十
旅先で年頃の娘をたのまれる　潮花

席題「茶漬」　黒川紫香選

お茶漬で軽くすませて朝を出る　賀峰
云い勝った妻の茶漬の軽い音　水堂
どっちみち茶漬で帰す客ときめ　潮花
茶漬けでも食うかさいきな家を訪い　山茶花
御茶漬もじやまくさいナーと妻の留守　十悟
お茶漬で女さっさと化粧する　栄断
玄関に待って茶漬の音をきく　言也
又茶漬かいなと茶腕叩いてる　愛論
闘病記茶漬たべたいことも書き　天真
途中下車してまで京で茶漬食い　一三夫
お茶漬けへ沢庵ポリ／＼母達者　与呂志
アパートの茶漬の音も気を使い　狂二
蕗のとう独りの茶漬たのしめり　水客
二次会へ来てかさ／＼と鯛茶漬　三司
胃の悪いくせに茶漬がやめられず　春巣
二人切りなのに茶漬の日が続き　いさむ
お茶漬でいいと早目に出る心算り　水客
妻はまだ誤解のとけぬまゝ茶漬　村雲
お茶漬で子供のいない朝を喰べ　紫香

（いさむ整理）

雑川　淀川支部句会（大阪市）

木村水堂報

療養貴族と云われてよしミキサー置き　三十郎
ミキサーを買ったが後が続きかね　由幸
ポケットへおねだりをする背になり　若菜
ポケットが可愛いがられる月給日　礼司
髭があるばかりに仲裁頼まれる　東洋男
仲裁があると見抜いた啖呵切り　水堂
仲裁へ女の声が高くなり　山茶花
こんな水溜りへも月が写って居　水茶

雑川　玉造（からほり）支部二周年句会（大阪市）

永田六竜子報

りんごむく手に顔色をほめられる　山茶花
知られまい咳肩掛へ吸いこませ　水茶
お悔みに来て保険の高も聞き　梅里
割勘と閑いて都合が悪くなり　文秋
何時からか盥の位置は決ったり　栞
間に合うて取れた保険の不仕合　井平
共稼ぎたらいで不平もなく洗い　思月
たてかけたたらいの隅の残り水　白柳子
彼氏もかわりマスコットも変り　好郎
マスコット不吉な予感へゆれている　六竜子
マスコット忘れられてる倦怠期　柳宏子
四五ケ月肩で息して人に知れ　草白
若後家の肩持ちすぎて疑られ　一三夫
ためになる話は妙に肩がこり　忘日
「御都合に依り」でとえらい目にあった　古方
都合よい時に二人へ雨が降り　昌子
良い話都合はどうにでもかわり　文蝶
理屈抜き二人の仲がほぐれて来　風間
会社では理屈の通る地位となり　一良
申訳理屈言うなと却下され　一栄
理屈やのつぼえ／＼と来る話　梅志
老妻の落付きはらっている理屈　孝子
コンパスの芯も狂った浮世です　清子
嵐去りけろりかんと羅針盤　宜介
日本がもう程近い羅針盤　恒明
恩師の一言人生の羅針盤　雅美
靴ブラシ昨日の事はとがめまい　賀峰
保険屋が午後の気分をかき乱し　春栄
強情に保険はきらいで押し通し　栞光
金だらいだけの音なり終い風呂　小松園
子沢山たらいの乾くひまもなし　貞句朗

雑川　ハワイ支部句会（ハワイ）

築山快夢起選

メーキアップ落せばはっきり年が上　草一郎
酌む酒に落ちた花びら捨てられず　いつ生
思春期に大人の世界腑に落ちず　陽炎
落ち付けば怒らずにすむ八つ当り　芳雨
落付かぬ心あの夜の顔が浮き　影法師
遊撃が落した球でスコアされ　周防
ボタ餅が落ちそうで此世面白し　旋風
日記帳つゞいて落葉の事も書き　暁舟
欲しい金ノーと云えない眼を落し　馬喜々
かけ落に決めた時間に来やはらず　紀南児
初なりの落ちたマンゴに傷がつき　潤之助
ヤケ酒にまた雷が落ちそうな　拝山
話上手女を落す術に長け　魔花麗
盃を落して酔いを意識する　迷朗
本能に落ちた話の色の濃さ　笑有
かるた会読手の膝に札が落ち　銀水
落付も出て来ましたと娘の便り　エス子
見合する落付も出来三十すぎ　鈴子
落第が出世頭という世相　快夢起
月ほめて落葉に肩を叩かれる　閻魔王
訪問に手ぶらの尻が落つかず　柳葉
幸福を月に二人の落す影　虹橋
落日に立てば故郷の空があろ　峯円
落つかぬ顔が失業語り合い　斧平
飛行場で落合うつもりの紅をつけ　伯楽
大臣の柄が落ちたと世を嘆き　大彦

雑川　篠山支部句会（兵庫県）

小西無鬼選

発表の朝茶柱が立ったのに　偶倍
皇太子妃発表今日も待ちわびる　文子
東宮妃発表迄の淡き夢　白猫児
デパートの包み虚栄が又持たし　比斗良
菓子包み覗いただけで蔵っとき　暁城
ママだけがぴたりと当てた包み紙　文平
前に立つ包み赤うて膝貸せず　左文字
もう寝よと親子スイッチ子にかえて　肇花
スイッチを忘れ大火にしてしまい　小菊
呼鈴のスイッチ押せば犬が吠え　柳常
スイッチを入れば拍手で終ったり　一風
スイッチを入れて姑の肩をもみ　越山
スイッチを捻って元の二人なり　無鬼
大臣の花輪どっかと前に出し　英断
スイッチを消したに話まだつづき　初穂

川雑

弓削支部句会（岡山県）

直原七面山選

煙草の輪派手に吹かした厚化粧　只世
灯を消せばこゝまで松の影がさし　葵邱
空財布をあざける様に灯がともり　青柿
千円札をすかして見てる夜店の灯　陽子
肉になる牛ものんびり草を喰い　秋月
脱税の社長のんびり湯にひたり　鋲吉
左手の趣味がとう〳〵山を売り　美舟
斗病に菊も作れる趣味を持ち　不老
倖せはのんびり釣りを楽しませ　笑雷
朝帰り化粧崩れに送られる　耕水
お姑が逝って里親のんびり来　承平
カメラ前に化粧崩れを気にする娘　七面山

川雑

備前支部句会（岡山県）

浜田久米雄選

独言言って響が通り過ぎ　正州
腹の立つ相手が去んで独言　娯句楽
振向りいてから独言また歩き　伊久野
判断に苦しみ抜いた独言　操
勇退を進める方にある苦心　三六
勇退へのんきどころか役がつき　幸仙
愚給がついて勇退ほのめかし　柳風子
勇退へ桜も今はまっさかり　運平子
躾より流行歌手にしたい欲　秋月
躾とも愚痴ともつかぬ小言いい　浄美
街道のほこりも春の匂いがし　東岸子
床の間のほこり私をせめて居り　綾女
独言やっぱり歩くことに決め　久米雄

川雑

高知支部句会（高知市）

大西迷窓選

はんぱりがついてお城も春を告げ　房子
春雨に濡れて柳の風情まし　とし子
桃の花故郷は潮干狩の候　寛
安静を少し怠けた春日和　栄子
お遍路の鈴もとけ込む春がすみ　一周坊
花がすみふと青春のよみがえり　紅梅
寝心地のよさそれんげ咲いてゐる　康子
春がすみ又宿直は独り者　三宮
もう少し歩きませうよと春の道　直喜
春ですと遺失係はもう嘆き　竹比呂
春柄をねだる女の目に出合い　白秋
行く宛もなく春風に歩をまかせ　俊一郎
曲線美からやってくる街の春　温夫
恋人はなくとも春へ出て見たし　玲羊
春の灯に舞う手に添うた三味の音　蘇水
誘惑に負けてならない春の夜　梅林
春淡し目高流れにまかせてゐ　久平
税務吏が春の陽差しへ腰を据え　康之介
サンドマン春の衣裳をつけ淋し　迷窓
喜捨を待つ乞食の弁当大きすぎ　土秋
夜荷役の寒さやわらじ夜の弁当　素有
先生の分も一折り持たせとき　左干子
弁当の蓋が合わない親心　耕生
お窓もタオルが二つ温泉場　蚊市
この春はあなたとよばれるハイキング　勝亀
空弁に御土産つめて夫帰り　源吉
汽車で行くパパに駅までママと来る　英太郎
年とればとる程母の良さを知り　そよ子
ある日ふと母に甘えて見たくなり　舟帆
花よりは娘とアベック見て帰り　茶々々
夜桜で呑み友達と顔が合い　由紀子
アベックの花見は奥へ奥へ行き　徳三交
商魂はタオルの柄にまで染まれ　進
タオル投げお前も這入れいい加減　俊江

川雑

大聖寺支部句会（石川県）

野村味平選

叱りながら折った桜を一寸活け　昌男
好い話ないかと失業やって来る　明石
乳房まで出して生きてるストリップ　寿子
姙娠の乳房をかくす貰い風呂　とよ
アルサロで乳房の張りを祕めている　味平
哲学を読んで秀才首を吊り　恒雄
秀才の出世を止めた薬壜　光郎
安らいだ気持夜店の前に立ち　一路

川雑

京都支部句会（京都市）

用中烏雀報

蚊帳匂ふ一人の女しか知らず　豊次
縞のもの夏の匂の女にす　司郎
魚屋の線香の香にも夏が来た　烏雀
嫌らわれているとは知らぬ男前　亀一
男前粡のきいろさをさゝやかれ　晴芽
よい男女物売る荷を背おい　紫蘭
二枚目を自負して街の男前　東門
銭なげられておがまれないのがおこちき　ゆきら
あなどらぬ様に表札男にし　古竹
雷鳴の中に交代時間来る　紅寿
雷鳴に耳を押えて妻若し　尚平
一輪の花ありりんごむかんとす　極堂
索漠と噛むりんごなり脛を抱く　礫
市外から市内で枯れる花を乗せ　礫
なすりあう子供硝子に紙をはる　亀一
被害者の印象細き指を持つ　尚平
たわいなき話へ鼻を寄せて来る　親生
でたらめな噂婚期を取り迷し　痴寒
ポケットをあちこち探している感傷　晴芽
捨て猫の市内らしきをふと感じ　司郎
やく事も知らぬ女房の丸い鼻　九角
心もとない感傷のポッカブリ　五黄子
市外電話の通じない市内ですゆきら
いのしゝを市内で取って帰って来　蘭華
お名残を夕陽の色にバスガイド　紫蘭
陽の下を獅子舞が山越えて行く　紫蘭
塀越える時の心理を言ってゐる　極堂

麦秋の村峠を越して薬売り　倘平
ゆっくりと読む新聞の位置にする　晴芽
境界を越して隣で玉子生む　九角
お辞儀しただけで想像させておく　司郎
長男の豊かな思想母のふの　甫三
伝説の峠を越えるアスファルト　ゆきら
想像をめぐらす淡き香にみとれ　親生
つかまらぬ事件の鍵を持つ女　鳥雀
借り電話豊かな部屋を見て帰り　亀一

雑川　下関支部句会（下関市）

石川侃流洞選

どの子にも思ひ出あり恩師酔う　蘇人
馳落ちの思ひ出もある老尼僧　成夫
想い出が次ぎ〳〵里のバスに揺れ　良坊
過ぎし日の血がまた騒ぐ人に会い　藤四郎
人のよい課長に仮病いたわられ　古山
共同のストに仮病も交代し　芳の人
五臓六臓へ仮病の食欲しみわたり　かうたる
仮病ふと母へすまない目をつぶり　吐泉
役得という顔がいる指定席　柳鏖
役得をもぎとるように左遷され　一規
こぼれ米鶏を飼ってる精米所　竹涼
役得の口は古参にさしくられ　九呂平
役得は眺めるだけの平社員　久仁男
云いわけの仮病真顔で抗議する　伊三男
役得に過ぎたる厨斗をもて余し　雪夫
役得のおこぼれ社員かしこまり　司楼
売れつ妓になってパトロン警戒し　茂美
頼母しいパトロンお嫁にゆかない気　チエ子
優勝へパトロンからの孤かぶり　迂川
前掛へ顔を埋めた恥しさ　侃流洞
前掛の端をつまんで言いしぶり　呑喜坊
前掛をすれば頑固のとれる父　柳蛙
前掛の下へ焼酎買うて来る　成理智
前掛のウロコが光りセリがすみ　ほなみ
パトロンが出来たか仲居のハイヒール　十字星
増築の噂役得のことにふれ　一歩
増築もせずに老鋪にあろ魅力　司楼
増築へ他人の算盤入れてみる　陶人
増築の母校へ無名の寄附が来る　鳥石
春雛へ鶏舎を継ぎ足す竹を結い　徒子
増築へ嫁の話もきまって居　つる平
アベックを窓から見てる独り者　千里
昼休み歌声明るいビルの窓　素人
アパートの窓に貧富の差が並び　飛水

雑川　倉敷支部句会（倉敷市）

椙原一善代選

口答えされて成程なと思い　万古
片腕になって小銭を貯めたらし　千古
口答期末賞与にまでひびき　春日
汚職の罪きせろ片腕こさえとき　春也
ニューモード女女へケチをつけ　五茶
本当の俳せ女になって知り　一念
口車やっぱり君も乗ったのか　一善
麦飯も腹一杯の幸福さ　越鳥
片腕はビルマの戦野に残して来　十九一
議員とは広告マッチの如きもの　不二郎
晩酌がさっぱり廻らぬ口答　千代春
待つ人があるのでしうと軽く妬き　亀庵
片腕と頼られろ身に自信なく　麗水
北風が手の無い袖を吹きまくり　風の子
今日も又茶碗を一つ割ろ嫉妬　きり子
美くしい顔で女の不しあわせ　明心
日曜日父も手伝うマッチ汽車　耕水
未亡人だから女房に詰め寄られ　承平
井戸端の賑おう裏にあろ嫉妬　三六
幸福は夫が炊事やって呉れ　笑雷
幸福は母あり母の肩をもむ　流風
文なしとわかってやめた口車　平平
口車のらぬ娘になっていた　実穂
口車たまには乗っていゝお客　狂風
幸福が授かりそうな子の名前　飴ン坊
口車乗せた儲けを山分し　広志
慰霊祭恩賜の片腕つれて行き　真奇
口車乗ったも惚れた弱身から　隆文
妬いているらしく給仕の手がふるえ　桃仙坊
お隣の普請へ嫉妬の眼で覗き　凡一路
女湯から耳の学問して帰り　しの女

雑川　岡山支部句会（岡山市）

土井雷山報

背に感ず冷汗妻の顔と合い　文生
ラッシュ時にリンゴがナイロンから転び　吟平
ナイロンの袋で金魚バスに乗り　陽子
冷汗が鼻の頭でよく光り　美舟
エロ本を読む伊達巻の腹んばい　伊久野
伊達巻が鼻声になりハットする　多賀雄
ナイロンを冠ったような嘘を言い　操
捨てられる示談覚悟の灰文字　苦楽
死の灰へ春雨などと言うとれず　綾女
真実を言う子の口に冷汗をかき　雷山
前身をお酒の酔が喋舌らせる　幽谷
伊達巻が似合わない程頼母しい　陳者
灰撒けば花が咲いたと言う昔　法院
男泣き夜霧をあてもなく歩き　東岸子
玉葱へ男やもめが泣いており　葵邱
御祝儀の酒で音痴も唄い出し　喜久次
冷汗を追従笑いのうちに拭き　酔歩
酔うているから灰皿へ落ちぬ灰　承平
男泣きくろりと向けた背がふるえ　正一
野球拳伊達巻とってから強し　哲郎
伊達巻も派手にして見る倦怠期　心酔
花の山冷汗をかく師と出合い　三六
冷汗を出させサーカス金を取り　秋月
履歴書は犯罪事項だけ省き　王硯
古傷の痛む話へ背を向ける　旭川市満嘉
一人旅だから車掌の親切な抱　月
前身に触れない夜を嬉しがり　久米雄

雑川　松江支部句会（松江市）

勝谷山川児選

母の日も悲し墓石となって居り　祥月
五指黒くした下駄男の子よく育ち　孤呂二
魚釣りに行ってしまった浮動票　三雷波
緋に驕ろつゝじの上の柿青葉　菊女
セパードと朝の緑を走るなり　山川児
日本の緑を汚す原子爆　冬生
常連へ素顔のまゝをつれ出され　可明
病床に素顔恥じらうのも女　喜久子
素顔では笑くぼ淋しい陰をもち　与根一
大山の素顔が覗く青葉風　天痴人

雑川　出雲支部句会（出雲市）

尼縁之助選

初物を好むマダムの処世術　独仙
新鮮な空気よさらば潜航す　白鷗
永玉のプリント新しい夏が来る　雲平
予想とは別なファイト持っている　李朋
畦に佇ち今年の出来を堅く踏む　代仕男
お初物ですわと女将注ぎに来る　壮
出席は否応なしの発企人　やすを
新鮮なミルク改場は晴れた朝　岬月
エプロンの下から初物届けられ　重信
PTA子の成績の順で来る　出雲
出席をしたのは呑める顔ばかり　万古人
ピンとした鯛を俎上に手のさばき　春軒
朝の市胡瓜の露も値に買われ　明水
新鮮な空気の試歩の足が伸び　亀平

予想だにせぬ税金の令書来る　披青
予想通りそれがかなしい待ち呆け　白菊
こんな筈でなかった馬券風に舞い　まき子
予想屋を横に百円損をする　絲之助

川雑　木次支部句会（島根県）

藤井明朗選

催促の電話多忙と断わられ　ますお
開店の多忙愛嬌も疲れて来　明朗
本性は別れともなし里で待ち　詩朗
本性は知れないまゝのおっき合い　富士子
年の功本性だけは見せない気　櫛原

川雑　婦人友の会（鏡野）

池上知恵美報

嘘かしら本当かしらにちとまよい　満寿子
ひとり娘の嘘へ親馬鹿ひっかかり　葉乙女
病人へやさしい嘘の水枕　きさ子
嘘ついてまでも独占したい慾　千代美
嘘つきとわかっていても好きは好き　花代子
嘘云えぬ父で貧しい日が続き　花鶴美
仲人の嘘をふたりで笑い合い　梅林
嘘もよし時には相手喜ばせ　奈良子
嘘一つ言えぬ気性で狭く住み　清子
嘘だとは知らず女房になりたがり　文子
いいのがれ嘘で埋めてほっとする　芙容
子沢山嘘を承知で貸してやり　年子
辻褄を合わす苦しい眼をそらし　千永
嘘だけは言わせぬ母の眼がきつい　美舟
嘘だとは思い度くない片便り　若菜
パパの嘘勘定書がまわって来　紫草
嘘の絵がきれいだからと先に売れ　有子
素晴しい嘘がつけそな桜の上　知恵美
嘘ついてこころの痛むひとに逢い　潮花

大阪通信病院川柳会

橋本幸男報

夜桜にパラソル持ったのもまじり　春巣
来ぬ人の席へパラソル淋しそう　兎風
厄介な荷物帰りは背で眠る　方正
老妻の持つ手荷物は肩が揺れ　幸男
温泉のラベル荷物あるだけつけてくれ　愛論
ハイキング荷物の多い女の子　春雄
手荷物が故郷の香を運んで来　みのる
嫁入りの荷物青葉の街に着き　夏生
お父ちゃんテレビ買おうかと末ッ子の　桃村
かつぎやをしてまで学資送ったに　みのる
アルサロで学資を稼ぐことが知れ　草右
学資ある家の息子のノロマにて　よしを
両親の意見も入れた学資着き　史葉
愛人の学資へ貞操までも売り　竹荘
母の愛学資のことは祕めておき　ハナ子
子は三つ今から学資積んで置き　峰春

大阪通信病院川柳会

麻生路郎選

情婦の貞操唯黙否権黙否権　春雄
貞操に税をかけたい儲けよう　草右
惚れ込んだ美女へ貞操疑わず　夏生
図書館の辞書は無慙や切りとられ　夏生
辞書にない当字で来るる妻ならば　桃村
ひくよりも枕になって辞書は老い　草右
孫だけがしわくちゃの顔なぜて呉れ　桃村
孫をだく手で二号だかえられ　方正
おばァちゃん育ち挨拶こましやくれ　春巣
声帯模写ひばりに似ている孫娘　幸男
立志伝株屋の小僧だけは伏せ　草右
株少し売って人間ドック入り　春巣
社員皆株主と云う町工場　蕗児
株を買い　みのる改め
招待券だけを貰うに株を買い　愛論
ためる気かチョッピリ株も買って見る　よしを
百株へ総会通知そりかへり　竹青
守衛していては株主とは見えず　竹荘
株も二号もあってやり手といわれ　ハナ子
交通費で儲け株で儲けている老医　幸男
孫があるなどとは云わず酌をさせ　路郎

みをつくし川柳会（大阪市）

戸田古方選

ふるさとでは神童と言はれたが　斗牛
新入生講義なかばで質問し　喜峰
政界の事は知らねど村平和　圭水
プラカード借金取りによけてみる　とし坊
オルゴールきけは想い出す人があり　夢人
チップ代ツケにさせられ不渡りし　繁雄
プラカードかついで明日へつなぐ夢　凡九郎
井の中の蛙で春をひとり抱き　玄武洞
というてもここの課長ちや知れている　のぼる
思出を祕めて閉じまずオルゴール　公子
仲なをり又オルゴール流れ出し　梨花
プラカード持てなとほけた顔に見え　雄声
井の中の蛙と思いたくなくて　古方
井戸の壁世界の涯と思うてる　歌宏
音痴でも覚えてしまったオルゴール

帝化川柳会（大阪市）

佐野白水選

八瀬に来てかゝりの良さを教えられ　九州男
大原女追い廻される行楽日　一平
大原女の山の苦労が顔に出る　一星
大原女のわらじの足袋に露が泌み　京一楼
大原女京のなまりで釣をくれ　葉乙女
居眠りを知ってかミシンの足が止み　花車
三百年経ても眠り猫は生き　寛峰
居眠りへ人の生命が今日も消え　利武
居眠りの恨みは富士を通り越し　雅堂
御迷惑でしょうがと寄附取ってゆき　好祐
籠まで立てられてるとは知らなんだ　与呂志
友達に迷惑掛けたらしい朝　白水

かがみ川柳会（岡山県）

潮花氏歓迎句会

池田古心報

一人子の気ままに親ももてあまし　香谷
気ままなと叱る夫へたよりきり　たつよ
里帰り気ままに昼寝して御坐る　周甫
遊ぶにはよき娘妻には気ままず　直行
手に職があって女房気ままなり　一旦
御隠居の気まま朝から湯につかり　文女
年寄へ気ままになさいが気に入らず　有子
子の為に命をかけて強く生き　満寿子
婆さんの癖口程でない命　古心
貰い乳命の親と子に教え　とも子
あす知れぬ命で人間よく動き　玉硯
十代の恋が命を軽く捨て　格花
先のことわからぬ命が慾をはり　あつき
命がけ惚れたお方と言い出せず　笑童
子の命かえて医者のドアー押し　知恵美
君逝いてからは命を軽んじる　明子
親からの命あっさり恋に捨て　静子
岩壁へ捨てる命へ乳が張り　年子

季節一品料理
江戸前にぎりずし
アベノ橋地下映画食通街
梅里の店
大萬
☆大万川柳（第六十五回）を募る
兼題「稽古」　路郎先生選
締切・七月十五日（郵送五句以内）
発表・七月二十一日（新聞掲示）
投句は　阿倍野区松崎町三丁目
一〇　大万川柳会宛

句外

不朽洞会から

▼市場没食子氏（大阪市）は、五月二十五日午後七時二十分天保山発関西汽船で今治着、新居浜の住友化学工業及び菊本製造所見学、琴平、高松、屋島を経て帰阪、「見学でゆっくり旅を楽しめず」の旅信を寄せられた。▼麻生路郎先生は苦心の著「川柳とは何か」を金光町金光教図書館から点字訳すること、懇請して来たので快諾されていたが多数の日時を経て三冊続きで遂に完成したとの朗報に接した。盲人の世界へ川柳が味われることは大きなよろこびである。▼菊沢小松園氏（大阪市）は、六月四日学校の役員会に参加須磨、明石、舞子へ観光バスで廻遊、三十年振に布引の滝を見て帰阪「須磨明石働く人も景になり」の句信を寄せられた。▼木下幽王氏（大阪市）は、丸三ケ月振に退院、目下住吉の自宅に療養せられ、句会出席出来る日を楽しんでいられる。一日も早く御軽快を祈る。▲阪田良坊博士（下関市）は名古屋市に於ける日本交通災害医学会総会及び鉄道病院長懇親会出席の為め五月三十一日出発、降雨の名古屋から「医学会医者も命を洗濯し」の旅信を寄せられた。▼亀井花童子氏の通信によると函館でも目下川柳雑川柳まつりの準備中だとのこと、盛会を祈る、▼小西無鬼氏（兵庫県）は、篠山町魚市場関係旅行に参加六月三日、天保山発、濃霧の高松港に遅延上陸、屋島、高松、坂出を経て琴平に宿泊、同地から「ハネムーンの時の宿屋を見て通り」の旅信を寄せられた。▼前山北海氏（東京都）は、四月中旬、新潟市に行き久々に白山の春祭を参観、新発田在の高沢一浪氏を訪問柳談に花を咲かせ帰京された。なお同氏は、近くハワイへ出航につき、路郎師夫妻に面会、最後の関西旅行を御計画中とのこと。▼麻生路郎先生は大阪ゆう、もあ・くらぶの常任理事として、又近く発会式を挙げる関西短詩文学連盟の理事長として多忙な日を送っていられる。元気益々旺盛なので短詩界のためによろこびに堪えない。▼阪田良坊博士（下関市）は、鳥取の新聞で路郎師御夫妻の御健康振を見て嬉ばれ、三十年前の大学時代の三朝温泉や飛魚の味覚を偲び、いつまでも御元気でありますと「川柳の醍醐味不老長寿なり」の句と共に書信を寄せられた。▼浜田久米雄氏（岡山市）からの消息によると、既報国鉄福山に出張兼務執務の処再び岡山駅助役として専任五月二十日から執務する事となった由。なお六月五日岡山駅で小西無鬼氏の来訪を受け柳談されたとのこと、▼笠松川柳会（福島県）では六月廿四日午後二時から矢吹神社で同神社の懸額奉納式と句会を開催したと▼福島鉄児氏（岡山県）からのたよりに依ると同氏の長女五月二十一日阪大病院に入院、六月上旬手術を受くるとの由、一日も早く御全快を祈る。▼田垣方大氏（岡山県）は、五月十八日名古屋へ出張同地よりたよりを寄せられた。▼弘津柳慶氏（下関市）は、五月五日誕生、翌六日は厳父十三回忌になるので東京、京都、広島、徳山の兄弟達郷里に会集、久々で快談、楽しき日を送られたとのこと。▼路郎師は、篠山町当局の懇請により同町学校へ額二葉揮毫執筆され、六月上旬贈呈式挙行の上、町長から校長へ手交、同校長室を飾らるゝ事となった。▼津秋六花氏（宇部市）は、育雛の指導のため二週間の予定で沖縄に出張六月上旬出発された。▼椙原一善氏（倉敷市）は、今回衆望を荷って、川雑倉敷支部長に就任され、事務所を倉敷市水島鶴生町四丁目三一同氏方へ設置された。因みに同支部は編集長に水谷谷水氏、同補佐に藤井春日氏、顧問に木村千容、田垣方大の二氏就任された。▼真鍋一瓢氏（大阪市）は次第に軽快になられたが少し歩くとまだ患部が腫れるとのこと充分に静養されたい▼福田清美さん（横浜市故福田山雨楼氏夫人）は、六月七日の、川柳山雨楼忌句会開催を感謝され、さぞ山雨楼も地下で喜ぶことでしょうと感謝の書信を寄せられた。▼山路閑古氏（東京都）は随筆と小説のあいをねらった軽い読もの十二篇を選び「土星と空豆」を東京都千代田区神田旅籠町二ノ六株式会社四季社から刊行された。十二篇中には曾って本誌で好評を博した「将軍娘」が含まれている▼川柳社人（仙台市）が六月一日発行の通巻六十九号で休刊することとなった。新味に富んだ同誌の休刊は惜しまれる。▼阿部竜太郎氏は今回柳太と改号▼私は富柳会の六月九日新緑吟行句会に招かれ好郎、梅里二氏と同行し南河内郡西方院へ出向、同地は芸術元祖小野妹子の墓所のあるところであった。▼矢吹日出雄氏は五月末限り一身上の都合により退会。（摩）

新会員紹介

六月

八杉　風車（安来市）正
　　美笑氏推薦
児島与呂志（大阪市）正
　　春巣氏推薦

川柳家の皆様の夏姿を美しくした
いと路郎主幹が自句を揮毫され、別染にした男女共通の

召しませ。趣味の川柳ゆかた

川柳まつり記念・川柳手拭・頒価七〇円・送料一枚・八円

小粋な浴衣です★頒価・八五〇円・送費六〇円★御送金は★社の振替を御利用下さいサービス部

学生教養新書　全五十巻
日本図書館協会選定図書

麻生路郎著

川柳とは何か
—川柳の作り方と味い方—

二五〇円　送三二円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。その川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、及びその作り方と味い方を柳壇の第一人者が五十余年間の実作者としての尊い経験を生かして最も平易にわかり易く説かれた斯道最適の案内書。

東京　川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払町

柳界展望

▲川柳の年中行事の一として多大の人気を呼んでいる本社川雑川柳まつりは、別稿通り本年は社の都合で七月八日（日）午後一時から光明寺で開催、句会出席者に、記念品、有志懇親宴等多彩な計画で開催される。多数来会されたい。なお各支部又川雑系各会でも全国一斉に此の吉日をトし路郎師出題の同一特別課題で路郎賞（個人）、優勝楯（団体）、の争覇競吟が行われる（特別課題の出句は各会とも出席者に限る）▼南区医師会文化部杏林川柳会（大阪市）は、六月十九日午後七時から比呂史居で開催▼南海電鉄川柳会（大阪市）は、六月十八日午後六時半から粉浜親和寮で開催▼大阪逓信病院鳥ケ辻川柳会は六月十七日午前九時半東阪天満橋に集合、京都吟行を開催。以上何れも路郎主幹出席▼川雑淀川支部句会（大阪市）は七月三日午後六時から武部香林居で開催兼題「香水」「サングラス」「小心」の三題▼大阪市交通局川柳会は七月十八日午後五時から岡町の交通局病院サンルームで開催兼題「婚約」「変人」「報告」の三題▼3・3・3川柳会（堺市）は七月六日午後六時から堺市鳥野工業株式会社会議室で開催▼川雑東都支部五月句会は、十六日午後六時から仲源寺で開催▼川雑岡山支部（岡山県）六月例会は九日午後六時から日赤支部で開催▼既報春季文化祭玉野市川柳大会は五月二十七日午後一時から鳴滝荘で開催高松、岡山よりも参加盛会の由▼川雑大原支部六月句会は三日午後六時から米花居で開催▼川雑岡山支部五月例会は十九日午後六時から第五鉄道寮で開催▼川雑米子支部（米子市）松露川柳会は六月十日午後六時から節枝居で開催▼岡山電報局川柳同好会五月例会は二十六日午後六時から同局で開催▼堺川柳人グループ主催恒例の魚夜市川柳大会は七月三十一日午後八時から堺市英彰小学校（寺地町停留所下車）で開催。句会後夜市場に特別入場を許される▼岸和田川柳会（岸和田市）は六月十一日午後六時蛸地蔵駅前、丸二食堂で開催▼愛媛川柳研究大会は汐風川柳社主催で五月二十日午後一時から今治港務所で開催、盛会の由▼蛇吟社主催秋田全県川柳祭は五月二十日開催翌二十一日男鹿半島周遊決行され三太郎、五花村、宜介の諸氏外多数参加された。▼平尋診寮所川柳句会（奈良県）は五月十四日同所で開催▼船木夢考氏（滋賀市）は六月三日食満南北氏の喜寿祝に上阪、有馬、箕面に一泊帰宅された。▼お九日、十日は富山へ十六、十七両日は名古屋の六十人の故川柳家の慰霊祭に出席するので多忙の由▼川雑下関支部の松本十字星氏の令閨が五月十七日に永眠された。謹んでお悔みする▼村田周魚氏（東京都）は本社六月句会の山雨楼忌を誌上にて知られ山雨楼氏を追惜し書信を寄せられた。▼延原句沙弥氏（神戸市）は病気寮養の処、此程全快五月より神戸新聞社へ出社執務され目下公私多忙の由▼伊丹与詩雄氏（岡山県）は、吉永駅長から伯備線足立駅長に栄転、岡山県阿哲郡新郷町、足立駅鉄道宿舎へ移転▼野々口美舟氏（岡山県）から、過般の鳥取市山陰川柳大会で予想以上の成績を嬉ばれ、今後層一層努力するとのうれしいたよりを寄せられた。▼米沢暁明氏（大洲市）からの消息によると大洲市に於て八月上旬愛媛川柳大会を開催目下計画中とのこと▼香川雅人氏（香川県）は、あぐら会を組織し毎月二回例会開催多忙の中、本誌誌友獲得に努力するとの嬉しい消息を寄せられた。▼高見薫氏（兵庫県）は寮友会川柳会に尽瘁せられ文化厚生に多忙の由。（摩）

柳人交歓暑中見舞広告を募る

八月号へ貴方の暑中見舞廣告を

★一ト口金二百円。幾口でも申込んで下さい一ト口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。一ト口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は七月五日着便

☆広告料は前金のこと（郵券代用でもよろしい）

川柳雑誌社

編集室

公私雑記は、ただもう忙しいと書くよりほかにないヨ、と先生は原稿〆切最終日ギリギリまで選句と文芸方面のお仕事で走り廻っておられる。——七月、いよいよ太陽の季節でもある。（一三夫）

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ…

近鉄特急

座席指定・ノンストップ

大阪—名古屋 2時間48分
大阪—宇治山田 2時間
名古屋—宇治山田 1時間40分

大阪上六発		名古屋発		宇治山田発	
7.40	15.40	8.00	16.00	8.47	16.47
8.40	17.40	9.00	18.00	9.47	18.47
11.40	19.40	12.00	20.00	12.47	20.47
13.40		14.00		14.47	

本社 大阪市天王寺区上本町6

近畿日本鉄道

募集

課題吟募集

転居（仲句以内）中島生々庵選
画家（仲句以内）三鴨 美笑選 七月二十日締切
枕元（仲句以内）菊沢小松園選
パン（仲句以内）伊藤 茶仏選 八月二十日締切

毎号募集

近作柳樽（雑詠半句以内）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）北川春巣選 麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）（毎月二十日締切）

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▲『課題吟』は誰でも投句が出来る。
▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

日刊5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 第十一卷 第七号
定価 五〇円（送料四円）
半ヶ年 三二四円
一ヶ年 六〇〇円

（載禁）
昭和三十一年六月廿五日印刷
昭和三十一年七月一日発行

大阪市住吉区西成区西五丁目二五番地
編輯兼発行人 麻生幸一郎
大阪市住吉区西成区西五丁目二五番地
発行所 川柳雑誌社
電話 住吉 ㊐ 六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

行發日一月七年一光和昭・本誌創刊日五廿月六年一光和昭　（行發日一回一月毎）可認特價郵便雜三第日一月七年二廿和昭

THE SENRYU ZASSHI

NO・350

Published monthly by Senryu-Zasshisha, Osaka, Japan.

高血圧を忘れよう！

サーピナ錠

1日1～2錠で高血圧の苦しみを忘れるサーピナ錠！成分含量も多くてお得です

山之内

眼のないはなし

パパもママも　ホーライ党

広東料理

蓬莱

大阪　なんば

若き日の夢は緑の夢…緑の島へ

国立公園

友ヶ島

7月1日から　9月10日まで

予約受付中

バンガロー・テント・なぎさの家
サンマーハウス・学校團体宿泊所

割引乗車船券　なんば から 往復 400円

お問合せ お申込は　南海交通社へ

なんば TEL ㉔ 2931・梅田新道 TEL ㉝ 5019
和歌山 TEL 2321

加太駅下車
バス連絡あり

南海電車

円四料送　圓拾五價定　誌雜柳川　號〇五三第